
A Z ~ アーツ ~

幻想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Z ～アーツ～

【Nコード】

N 2 5 3 0 S

【作者名】

幻想

【あらすじ】

人々は住処を巨大なドームに移し、企業が力を持つ時代。人型兵器A Zを駆る主人公、ミサキ・トウザキは勤め先の警備会社から大企業アマツへの出向命令を受ける。

そこで出会う仲間、戦場で相対する敵。半円形のドームの中で生きる人々の物語。

1-1 序章

前方のスピーカーからノイズを処理された轟音が響き、視界の一部に文字が走る。

『前方30 敵小型ミサイルの着弾を確認——』

前方百五十五度という従来より広い角度まで表示範囲を増やしたモニタに各所のカメラからの映像と各種計器の数値が映り、操縦者ミサキ・トウザキの顔を薄い光で照らし出した。

前方はほぼ土煙りに覆われている。握ったグリップのボタンを親指で操作。映像に被さるようにショートカットキーで呼び出された半透明のウィンドウが出現、各種レーダーの結果を平面上の丸と四角で表す。

それに合わせるかのように、耳を突き刺すような警告音。左。

再びペダルを操作、歯をきつく食いしぱり加速に耐えつつモニタに視線を走らせる。

ブースターの推進の風に蹴散らされ晴れていくモニタの画面、コンクリートに幾つもの金属の粒が雨のように駆け抜け、穿っていく。頭上から降る雨とは違い、それは左上から降り注ぐ。

ウィンドウの中の地形は変わらない。

自機を表す画面中央に固定された丸い点の左右に、障害物を表す長方形が伸びている。モニタの左右で前方に駆け抜けていく——実際はこちらが後退しているためにそう見える——ビルの群れがそれで、平面上では数値でしか現れないそれらの高さは多少上下するものの、頭部カメラを通したモニタに表示される目線の倍はあるようだ。

左右の幅は車一台分あるかどうか。加速しているにも関わらず徐々に近づいてくる金属の豪雨から逃れるには全く足りない。

「横は無理かつ……！」

歯の間から絞り出すように呟き、ミサキは足に力を入れた。途端、

押しつける力のベクトルに上方から潰されるようなものが加わり身体を軋ませる。

灰色のビルの側壁を映すモニタ端の高度計の数値が上昇し、モニタの下方、直前にいた場所をえぐる雨粒。新たに小さなウィンドウが開き、カメラがとらえた雨の出所が拡大される。

映るのは廃棄されたビルの屋上で右手に握る長方形のマシンガンを撃ち続ける人型。顎を突き出した猫背の人間のようなシルエットだが、生身の人間ではない。段ボールかブロックを積み上げたような、直線で構成された「それ」の大きさは人の約四倍。

戦車でも、戦闘ヘリでもない。二本の足と二本の腕を持つ人型兵器、A.Z。^{アイツ}モニタに映るのと——今、ミサキ自身が駆っているモノがそれだ。

ウィンドウの直下に注釈のような文字と数字の羅列が並ぶ。

『機体参照——N・O・O・D・製A.Z——イニティウム改良型』

横長の直方体の形をした頭部の頂点にぼんやりとした光が浮かぶ。全身にカメラを内蔵したようなこちらに比べ、一世代前のA.Zであるイニティウムの「目」は頭部を上下左右に一周する溝の中を動くカメラと、足元を見るための股間の補助カメラしかないので、視野が狭い。

背面のブースターによって急上昇したこちらをカメラが捕らえきれず、いまさら追いついたらしい。

相手が左肩に背負うように装備された小型ミサイルの発射口を向ける動作の途中で、こちらの射撃体勢は整っている。

右手にホールドしたライフルの照準がモニタの中央に収めたイニティウムのシルエットと一致。

グリップの引き金を引けば、モニタの端に映った銃口が一瞬強く輝く。それが三回。コクピットの収められた腹部を音速を超える銃弾が穿ち、衝撃で転倒させた。

さらに腹部に二発を撃ち込みつつ、機体各所の姿勢制御用バーニアでバランスを取りながら、ブースターをふかし前方へと空中を移

動。

倒れたイニティウムの脇へ降り、モニタの画像を拡大、コクピットに着弾していることを確認して、そこでようやくミサキは軽く息を吐いた。

見苦しくない程度に、と伸ばした前髪が目の前で揺れる。モニタの明かりに照らされる顔は二十歳になってもうすぐ一年という青年には見えない。

線が細く、長いまつげやきめ細かい肌も相まって、下手をすると少女と見間違われることもある。

造作は悪くはないが、決して逞しくは見えない顔は彼の小さなコンプレックスだった。

半透明のウィンドウの中に自機以外の熱源がないことを確認し、無線を起動。

「三号機から隊長へ。こっちは終わりました」

ザザ、とノイズ混じりの割れた声が降ってくる。

『……こっちも、今……ったところだ……合流ポイントに……』

「了解」

仰向けに倒れこんだイニティウムを横目にビルの屋上を蹴って宙に舞い、ブースターで落下速度を抑えながら機体を地面に近づけていく。

鈍い着地音と共に薄く土煙り。各所のサスペンションに殺され、衝撃はほとんどない。

無線を切り、モニタに合流ポイントまでのルートを表示させ、コントロールをセミオートに設定。

「これでよし、と」

あとは、ルートにそって機体が勝手に進んでくれる。

シートの背もたれに体重を預け、モニタ上に流れていく無人のビルをなんとなく眺める。

窓が割れたり、外れたりしているものが多く、まともに残っているものは数えるくらいしかない。

モニタ上に表示される現在地はルージュ・ドームの第二階層。管理するのは世界第一位の総合資産を持つ大企業、「トリニティ」。

第一次産業の生産から第三次産業のサービス関係まで、全ての分野で商業を展開しており、管理するドームの数も世界随一。

1 - 2 序章 2

旧暦時代の終わりに設立され、約六十年前の新暦二三年の所謂「アーサー・トレース事件」によってその体勢が崩されるまで、この世界は一つの巨大な企業によって管理されていた。

旧暦後半から急激に進んだ環境変化は終盤には人類の存在そのものを脅かすほどのものとなった。

地震や台風、津波や干ばつといった自然災害とそれに伴う二次災害の影響により、一時は百万を超えた人類の四割をたった七十年と言う短い期間の内に削り取っていく。

災害で生活を脅かされた人々は、各地に巨大なドームを作り、その中の安定した環境へ生活の基盤を移していった。

このドームは、すでに国際化や紛争により形骸化していた「国家」という枠組みにかわり「企業」がそれぞれの財力・技術によって建設し、管理することになり、ほぼ全ての人間がドームへと移住したころにはすでに「国家」という形骸すら消え去っていた。

そして旧暦最後の年、地下の巨大な通路によって繋がれたドームに住む人類を効率的かつ的確に把握・管理することが出来るようにと、全ての企業を統合した「世界公社」が誕生した。世界公社の管理する枠組みの中での人々の生活が始まったのだ。

そして新暦に移行して二三年が経過したのち、その体勢を崩壊させたのが、前述のアーサー・トレースである。

「世界公社」の管理するドームの一つ、「トリニティ・ドーム」の政策責任者（「世界公社」の決定した政策の指揮をとる責任者）だった彼は、「世界公社」という一つの企業が市場を独占する競争相手のいない状況では、技術開発や環境改善の停滞が起きると指摘賛同する幾つかのドームの責任者と共に連判状を提出し、総合独立企業「トリニティ」を設立した。

彼は「世界公社」を競争相手とすると宣言、企業の要は人材であ

るとしてドームにおける各種サービスの向上や技術開発を積極的に行い、「トリニティ」管理下のドームへの移住希望を増加させ、これを競争力しようとした。

「世界公社」側も対抗策として各種の対策を打とうとしたが、巨大すぎる企業の内部の意見をまとめることに時間をかけすぎたため、独断で独自政策をとるドームが現れる。これらはアーサーを倣い次々と「企業」としてドームを「世界公社」から独立させていった。

この流れは止まらず、結局新暦二四九九年にかつての規模の面影すらなくなった「世界公社」は世界最大の企業となった「トリニティ」の傘下の一企業として吸収合併され、世界から姿を消す。

しかし動き出した流れは止まらず、その後も各企業が合併と独立を繰り返し、現在に至る。

アーサーの死後も「トリニティ」は多くのドームを管理する大企業として君臨しており、幾つもの企業を取り込んだN・O・O・D・（ノード）がそのあとに続き世界第二位となっている。

「アーサー・トレース事件」の後、「世界公社」によって管理されていた各ドームの住人は居住決定権を与えられ、自らが選んだドームへと好きに移住することが出来るようになった。

各企業は彼ら人材を招き入れるために個性的な各種のサービスや政策を実施している。

ここ、「ルージュ・ドーム」の「売り」は景観だ。

世界共通言語として普及している統一言語でいう「赤」をあらわすルージュという名の示す通り、ドームの中に広がる街全体が赤系の色で統一されている。目を楽しませる暖色系の街並み、というのを宣伝文句としている。

むろん各種政策も他に劣ることはない。

他の部分で差をつけられず、さらにオリジナリティを維持するために、一定の色や旧暦の街並みで統一するのは割かしよく見受けられる安全策だ。

逆に冒険に出た街は、「女性のみ」「全ての公的な罰則を撤廃」など極端に走ってみたいりする。

だが、今モニタを流れる、天井から降り注ぐ薄い光に輪郭をぼやけさせる街並みは「ルージュ・ドーム」の政策に反し、ネズミ色のビル群が大半を占めている。

別に、「ルージュ・ドーム」が政策を放棄したわけではない。

ここが、「第三階層」だからだ。

ドームは大きく上下の三区画にわかれている。

最上部、「第一階層」は半球の中ドームの中、唯一地上に露出した部分だ。超硬質ガラスによって自然の太陽の光の恩恵を受けることが出来、大抵の場合は企業の重役の家や重要施設が設けられている。

真ん中の第二階層は、第一階層にオフィスを構える企業の傘下にある企業の施設がや社員の住宅が並んでいる。天井の照明から太陽とほぼ同等の明かりが与えられ、空調も管理されており、定期的に人工雨も降る。三区画の中ではもっとも人口が多い。

この「第一階層」と「第二階層」までは、宣言した政策が実行されることになっている。

それは逆にいえば、第三階層には政策の実行をしなくてもいい、ということ。

これは、第三階層が各ドームを結ぶ地下通路と直結しており、ドームの一部と言うより公共の通路として認識されているためである。下手に政策を実行すると「決められた色でない車は通行禁止」といった制限が出来てしまうのだ。

だから大抵の住人は第二階層以上に住むし、「人材」のいない第三階層は何もない、もしくは作られた当初の街並みが残ってはいるが管理されていない、というのが常だ。

しかし、そんなところにも——というより、そんな所だからこそ、住みつく人間がいる。

文字通り陽の当たるところに出ることのできない犯罪者や過激思想を持ったテロリストといった連中だ。

今回の相手のように、物資を強奪して横に流す強盗達の拠点になることもある。

——まるで墓場だな

灰色のビルの森を横目で見ながら、ミサキはそんなことを思った。照明が弱いせいで細部が影となり、細長い建物が並んでいる様は林立する墓石に見えなくもない。

『……サキ？　こちら、二号機のアイシャ。合流まであと何分？』

コクピットにながれる女性の声。入ってきた無線は先ほどより大分聞きやすく、ノイズも少ない。距離が近いのだろう。

モニタのルートを確認。次の角を左に曲がれば合流ポイントだ。

「こちら三号機。あと少しでつきます……着きました」

曲がった先に、二機のAZが通路を塞ぐように立っていた。

鶏冠のように後頭部に立つ三角形のリーダーが特徴の、AZ技術において世界最先端を誇るアマツ社製AZ、「トツカ」。

イニティウムのような第一世代を全てにおいて超えるべく開発された、世界初の第二世代AZで、世界中で使用されている傑作機である。

先ほどのイニティウムが積み重ねた段ボールを思わせる直線の組み合わせだったのに対し、こちらは滑らかな流線形が多く、より人

間の身体に近いシルエットになっている。

また、重ね着したような太い四肢のあちらに対し、トツ力をはじめとする第二世代A Zは技術の進歩により素の手足のような細さを実現した。

もともとA Zは従来の戦闘機が使用できないドームの中での兵器として開発されていたものだ。第一世代ですら整地・不整地を問わず戦車以上の機動性と攻撃能力を持っている。被弾面積を減らし、それでいて第一世代以上の防弾性能や耐久力を持つ第二世代A Zが現在の世界の主力機となるのは必然の流れだった。

『お疲れ様。そっち、どうだった？』

無線からアイシャの声が流れ、向かって左側のA Zがライフルを掲げた右腕を軽く上げる。

「イニティウムが一機。そちらは？」

『A Z——イニティウム一機、戦闘ヘリが二機。強盗にしちゃあ随分な戦力だったな。ヘリはともかく、旧式だろうとA Zは安いものじゃないんだが』

答えたのは男性。一号機のパイロットでミサキの所属する警備会社「カナメ・セキュリティ」の実働部隊の隊長、オーツ・マイヤー。ドームの依頼を受け、不審集団の排除やストライキの鎮圧を行なうのが警備会社だ。大抵のドームにはいくつかの警備会社が存在しており、これらはドームの管理企業の傘下という扱いをされている。緊急時には、企業直轄の戦闘力としても機能するからだ。

『しかし、なんでわざわざアマツ傘下のウチが派遣されてんだか。

ここってトリニティのドームでしょ？』

アイシャの問いに、マイヤーが応える。

『詳しいことは聞かされていないが、トリニティがアマツに依頼し、それが我々に回ってきたらしい。噂だが、最近トリニティはアマツに接近しているようだ。これもその一環かもしれない』

『くわしいわね』

『ニユースの受け売りだが——ああ、少し待て』

無線越しに、マイヤー機の無線の音が小さく流れる。内容までは判別できなかった。

『連絡が来た。あらかたの強盗共は分隊が拘束した。これより撤収する。地下通路の入口の回収車両までのルートを送るからついてこい』

無線に被さり短い電子音が響き、モニタの端に新しく地図が表示された。

1 - 3 始まりと、出会いと

「出向……ですか」

「ああ。頼めるかね」

戸惑うミサキの前で、机に肘をつき体重を預けて座る初老の男性が口を開く。机の端で「社長」の半透明の立体が回っている。

アマツの管理するドームの一つにある、カナメ・セキュリティの社長室。

任務から帰還し、報告書を書き終えたところでアイシャを通して呼ばれた社長室だ。

「知つての通り、わが社はアマツの傘下の警備会社だ。そのアマツのほうから、A Zの操縦できる者を一人出してほしいといわれると断ることが出来なんだ。」

すると誰が、という話になるのだが、マイヤーは実働の隊長で経験も最も豊富だ。後輩の育成のためにもいてもらわねばならん。二番手のアイシャ・ユシアも分隊の指揮がある。となると、ここで三番手の実力を持つ君を推薦したいのだが」

「はあ……」

「わが社のような一傘下よりも、アマツ直属の部署ならば経歴に箔がつくし、給料も悪くはない。どうかね？」

幸い独り身で、今の住居も会社の寮だ。入社三年目で愛着はあるが、辞令を拒むほどでもない。——そう思い、ミサキは背筋を伸ばす。

「わかりました。転属、了承します」

「そうか。助かるよ」

安堵の息をつき、社長は机の引き出しから数枚の紙を束ねた書類を取り出す。

「詳細はこちらにある。頑張ってくれ」

そんなやり取りが、一週間ほど前。

ドームへの住民登録を終え、寮の部屋に私物を運び終えて数日、新しい仕事場から集合がかかった。

「まったく……無駄な広さをしているな、ここは」

ぼやきながら、ミサキは頭を掻いた。

長い廊下の角に設けられた踊り場のような休憩所に腰をつき、手にした空の缶をクズ入れに投げ込む。

硬質な音が無人の廊下に響いた。

「こいつは、困ったな……」

懐から鎖の付いた懐中時計を取り出す。時刻を示す以外の機能がない、長針と短針が文字盤で回る骨董品のような時計だ。

蓋をあけ、示す時間を見、ミサキは嘆息する。

「こんなところで座ってる場合じゃないんだがな」

ミサキがここ、「アマツ第三研究所」を訪れたのは、一時間と少し前のことだった。

このどこかに、ミサキの新たな仕事場となる「第六課」という部署があるはずだ。

鋼鉄の門扉をくぐり、身体検査と手荷物検査を受けて中へ入るまでに十分ほどの時間を取られ、それから時間中、彼はこの建物の中をさ迷い歩いている。

曲がり角に設置されている標識をみてそれらしい部屋を探しているのだが、どうにも見つからない。各所に掲示されている地図も見だが、最後の確認は十分ほど前。最早どこにいいのかどころか、その地図の場所すらわからない。端的にいつて、迷ったのだ。

これは彼の三半器官に問題があるわけではない——と、ミサキ自身は思う——この建物の構造が特殊なのだ。

うる覚えの地図を頭の中で広げる。同じ階にある部屋から部屋へ移動する場合、一度階段を上ってから廊下を渡り、元の階に降りなければならぬ箇所が幾つもある。また、建物の形は五角形をしており、対角線のように幾つもの廊下が伸びている。地図は、まるで蜘蛛の巣のような図形をかたどっていた。人工物とは思えないほどに機能性を排した複雑さであり、いくつかの廊下を曲がるとすぐ、自分がどこにいるのか分からなくなる。

そんなわけで、ミサキは延々と建物の中を歩き回っているのだった。

「せめて、誰か人がいればな……」

はあ、と再度のため息をついた時。

コツコツと廊下を靴が踏む音が耳に流れ込んだ。

音はだんだんと近づき、やがて音の持ち主が現れる。その影を確認すると同時、ミサキは声を投げた。

「ちよつといいですか——？」

疑問符が届くころ、ミサキは相手の姿を確認した。

「ああ、ちよつどよいところに——私も尋ねたいことがあります」
ミサキと同じか多少年下か、そんな年齢の、ブロンドの髪を伸ばした少女だった。

一目で美人と断じても異論の出ないような顔立ちの中、意思の強い光をたたえた深海の色の瞳にこちらの顔が映る。

デザインに多少、それにズボンとスカートの差があるものの、着ている物はミサキと同じような制服だった。ほぼ間違いなくこの社員だろう。

「すみませんが、「第六課」という部署はどこにあるんですかね」

「は——い？」

秀麗な眉が一瞬上がり、逆八の字になり、青の瞳が疑惑の目線でこちらを射抜いた。

「貴方、この社員じゃありませんの？」

「ああ、いや、今日からここに出向してきたんです。どうも迷ってしまったって」

もしかすると、社員ならだれでも知っているような場所なのか。そんな不安が一瞬よぎる。しかし。

「なんてこと」

女性は軽く額を抑え、落胆の感情をしぐさと目の色と言葉であらわす。

「私も、本日ここへ出向してきたのですわ。標識と地図を頼りに歩き回った挙句ここまでたどり着き、ようやく人がいたと思ったたら貴

方も新入りだとは。——私が思いますに、あの地図はどこか間違っているのですわ、そうでなければ貴方はともかくこの私がこんな施設で迷うことなどあり得ませんもの。まったく、初日からとんだ厄日ですわね」

大時代的な口調で長い独白のを放った後、女性はこちらを睨むような視線で見た。

その視線は決して心地良いものではなかったが、ミサキもまた天国への扉へ足をかけようかという時に地面が抜けたような落胆に襲われていたため、気にすることはなかった。

「つてことは、あんたも迷子か？」

「まさか」

腕を組み、ミサキよりもやや低い目線から自信に満ちた笑みを浮かべる少女。

「私が迷子などと。ただ、すこし寄り道が過ぎてしまっただけですわ。そろそろ「第六課」に向かいませんか」

大気を拡散するようにボリウムのある金髪を掻きあげ、では、と軽く礼をしてミサキに背を向ける。

その背に、声を投げつけてみる。

「ああ、あんた、そっちも訊きたいことがあるんじゃないのか？」

一瞬間を小さく震わせて立ち止まった少女は、振り向かずには言い放った。

「なんでもなかったのですわ。貴方に尋ねても仕方のないことです」

「そうか、ならいいんだが——」

「では、失礼」

「ああ、ちよつと、待ってくれ」

やや足早気味に廊下を進もうとする少女を、再度呼びとめる。

「なんですか？ 私、早く行きませんか、時間が……」

「あんた、「第六課」に行くんだろ？ 俺も着いていつていいか？」

「はあ？ 貴方、「第六課」に用事でもありまして？ それに——なぜ私が「第六課」に行くことをご存じですか？」

どうやらあまり人の話をきかない性格らしい。

そう思いながら、ミサキは立ちあがり、少女を追いかける。

「俺は最初に「第六課」はどこにあるか、ってあんたに訊いたし、あんたは自分で「第六課」に行くって言ってたじゃないか」

「そういえばそうでしたわね。貴方、搬入業者かなにかの方？」

第六課は新設と聞きますし、ただでさえ迷いそうなのに色々とお荷物があつて大変ですわね。私の私物があつた時には丁重にお願いしますわ」

「なんでそうなるんだ……。さつき出向してきたって言わなかったか？」

「さあ。私、人ごとに聞き耳を立てるような真似はしませんの」

悪びれもせず胸を張って言いきる。どうにも唯我独尊な印象を受ける相手だ。

もしかしくなくても、この少女の出向先は第六課のような気がするし、そうするとこの少女が同僚になるということか。

「俺は、第六課に出向してきたミサキ・トウザキ。本業はA Zのパイロットだ」

「パイロットですって！ それも、第六課の！？」

大げさなまでに驚いた声が長い廊下を駆け抜けていった。

目を見開いて口に手を当てた少女は、いぶかしむ目つきでミサキの足の端から頭の上の空間までを眺め、一言。

「驚きですわ」

「そうか？」

「ええ。わりと身体は鍛えてあるとみますが、その、なんとなくか…… A Zを動かすところがイメージ出来ない、というか……」

痛いところに細い針が十本単位で突き刺さった心を宥めながら、ミサキは女性に問うた。

「悪かったな。で、あんたは何者なんだよ？」

「当然——」

ばさ、と掻きあげた髪を広げるように降ろす。金糸が宙を舞い、

ゆつくりと降りてくるのを待ち、少女は続けた。

「——AZのパイロットですわ。私、『ナイト・オブ・トリニティ』から第六課へ出向してきた、ナディア・メッテルニヒと申します」

「『ナイト・オブ・トリニティ』だって？ トリニティ社の？」

『ナイト・オブ・トリニティ』。「トリニティ」の所有する軍事力の中核であり、他の傘下の警備会社とは格の違う扱いを受けている精鋭部隊だと聞く。存在は聞くが、実際に人目につくことはあまりなく、企業の宣伝のための虚構の部隊と言う話もあるが、この少女の話が本当ならば存在はするのだろう。

「ええ。あなたがどこから出向してきたのかは存じ上げませんし、興味ありませんが——それだけは心に刻み込んで置いてくださいな」

腕組みし胸を張るその姿が似合うのは、それだけの場所に所属していたという自尊心があふれ出ているからだろうか。

「ま、覚えておくよ。……ああ、もうこんな時間か。不味いな」

開いたままの時計を見れば、時刻は集合時間の十分前。流星に初日から遅刻するというのは戴けない。

「とりあえず、話は歩きながらでも出来る。今は急ぐぞ」

「あ、待ちなさい！ 他に言うことはありませんの！？」

歩き出したミサキを、ナディアと名乗る女性が肩をあげて早足で追いかけてくる。

「あんたがどれだけ凄いパイロットかは知らんが、今は時間がない」

「まあ！ 自分から質問をしてきておいて、なんて言い草！」

「そりやすまないな。だが、今は時間がないんだ——見る」

眉を鋭角に立てるナディアに懷中時計を突き出す。文字盤を一瞥したナディアは、ぎっと唇を噛み、足を速めた。

「仕方ありませんわね。詮議はあとです。さあ、道はどちらです！？」

「俺が知るかよ！？」

「そんな、理不尽ですわ！」

ナディアは愕然とし、これ以上ないというほどに目を見開いた。

「知らないからあんたに聞こうとしたんじゃないか！ あんた、さつき迷子じゃないって言っただけだろ！？」

「迷ってはいませんわ！ ただ、そう、寄り道が過ぎて——現在地が把握できなくなっただけですわ！」

「充分に迷子じゃないか！」

理解した。ナディアもおそらくミサキが初めに投げた質問を抱えていたのだ。ただ、自分が迷っていると認めることが出来なかったのだろう。

——最悪だ。最悪の展開じゃないか

ミサキは片頭痛を患った気がして、こめかみを押さえた。

1 - 4 第六課

「初日から遅刻とは、いい度胸だ」

女性用制服に身を包んだ長身の人物が、ショート黒髪の下の鋭い目でこちらを刺した。

「すいません……」

「申し訳ございませんわ……」

時刻は集合時刻を十分ほど過ぎている。「第六課」という新品のプレートがはめ込まれた扉をミサキが見つけ、ノックしたところ、応えたのがこの女性だ。

部屋はそれなりにひろく、壁に書棚が並び、六人分の事務机と椅子があってもスペースが余っているように見えた。

「これで、一応全員がそろったわけだ」

女性の視線を追う。六つの机は五つが中央で島を作り、少し離れて入口の対面の壁を背にした一つが配置されている。

島になっている机の手前二つに、女性が二人座っていた。

視線が合うと、一人は無表情で、一人は赤いフレームの眼鏡の下で目を線にしてにこやかに笑ったまま、軽く会釈をしてくる。

「その扉を抜けた場所に、会議室がある。そちらへ移動しろ」
命令し、指したのは部屋の奥の扉。

「全員？ 机に対し、おひとり足りないようですが」

ナディアが疑問の声を上げると同時に、背後の入口の扉が、ぱたんと勢いよく開かれた。

「なんですの！？ ノックもせず！」

驚き振りかえったミサキとナディアを含めた全員の視線が、扉を開いた人物に集中する。

「ああ、着いたんですね。ご苦労様です」

視線を気にするそぶりもせず入ってきたのはまたもや女性だった。染めているのか、炎のような紅く短い髪が目立ち、その下には活発

そんな大きな瞳が覗いている。身長はナディアと同じくらいか。耳元で銀のリングピアスが揺れた。

「ども、第六課、セリナ・ナカザトです。よろしくお願いしますね」
フランクな口調で告げ、長身の女性に尋ねる。

「で、今どんな感じなんですか？」

女性は顎で奥の扉を指した。

「さて、諸君。私が第六課課長のカリスタ・ロングだ。ようこそ第六課へ。諸君らを歓迎しよう」

会議室と言っても、先ほどの部屋から机を運び出して椅子を多めに並べたようなものだ。他に違いは、壁に純白のスクリーンが掛かっていることくらいか。

そのスクリーンの前で、カリスタと名乗った女性が手に持ったリモコンを操作する。

スクリーンに「第六課」の文字が投射された。

「とりあえず、全員自己紹介をしてもらおうか。そうだな……お前「俺ですか？」

最前列の右端、指されたミサキが椅子から立ち上がる。

戸惑っていると、はやくしろ、と目線で言われた。

「カナメ・セキュリティの実働から出向してきた、ミサキ・トウザキです。本業はA Z乗りの、二十歳です。ええと、以上」

「よし、次。となり」

どうやら終了して良いようだ。やれやれ、と席に着くと、入れ替

わりにナディアが凜と立ち上がる。

「トリニティ社、ナイト・オブ・トリニティから出向いたしました、ナディア・メッテルニヒです。専門は当然A Zですね。皆さま、どうかよろしくお願いします」

ナディアは優雅に一礼して、羽の落ちるように静かに着席した。カリスタは眉ひとつ動かさずに次、と言う。

「どうも、さつきも言った通り、セリナ・ナカザトです。元はアマツと契約してた傭兵で、A Z乗りの二十三歳、ああ、独身で彼氏募集中です。お買い得ですよ？」

ミサキに片目をつぶって見せるセリナ。どうにもひょうきんというか、軽い性格のようだ。ナディアに比べれば格段に付き合いやすい雰囲気ではある。

「次」

カリスタの態度は変わらない。立ち上がるのは、先ほど無表情に会釈してきた女性。

座っているときは気付かなかったが、身長はナディアやセリナよりも低い。黒髪に黒目の、ナディアが——古い言い方だが——西洋的だとすると彼女は東洋的な、人形のような顔立ちだ。

「フィア・アーウムラウトです。専門はA Zの操縦です——以上」

やはり、無感動な瞳で前を向き、無表情に告げる。着席の動作も機械のようだった。人間味の少ない表情や仕草からは年齢がわかりづらいが、もしかするとナディアよりも年下なのかもしれない。そんなことを思うミサキの視界の端で、左端に座った眼鏡の女性が立ち上がる。明るい茶色の髪が揺れた。

「アマツの技術開発部——ここの一課からこちらに配属された、マヤ・キサラギです。ええと、作戦中のオペレーションや開発部への連絡役や、まあその他いろいろサポートが仕事です」

よろしく願います、と頭を下げて着席するのを見届け、カリスタが口を開いた。

「先ほど言った通り、六課課長、カリスタだ。現場、デスクともに

諸君らの総括をする。さて、まず、この第六課について説明しよう」
ぴん、と皆が背筋を伸ばした。

「この第六課はアマツ直属の第三研究所に所属する、A Z運用部隊だ。通常の直属警備部隊はアマツ本社やこの研究所にも存在するが、あちらとは基本的に接触をすることがない、独立部隊としての位置づけとなっている。ただし、作戦は本社の作戦部から送られてくることは留意しておいてくれ。まあ、諸君らは与えられた作戦を完遂してくれればいい」

言葉を切る。さて、と呟き。

「聞いているかもしれないが、第六課は試作された兵器を運用するために新設された部隊だ。諸君ら優秀なA Zパイロットが招集されたのも、兵器の性能を引き出すことが出来るように、という必要性からだ。作戦の成功を優先するが、試作の装備の運用実験としてこれらの使用を任される場合もある。これらは開発部からの要請次第で、正当な理由がない場合、基本的に断ることは出来ない。これも留意しておいてくれ」

以上だ、とカリスタは締めくくった。

「次に通常の勤務について。基本的に九時から五時まではローテーションで待機してもらう。さらに、演習を行う場合は必ず全員がそろつように。演習日程は各自の登録した携帯端末に送信されるほか、この隣の事務室に掲示しておく。

事務室には各自、一人につき一つの机が支給されている。私物の持ち込みは基本的に自由だが、あまり度が過ぎるようだと注意させてもらう場合がある」

……等々、延々と言葉が並ぶ。よく覚えているものだとミサキは感心する。

そんなことを考えているのが露見したはずもないが、カリスタがこちらを見たような気がして、ミサキは小さく首をすくめた。

「以上の事項は諸君らの机上の冊子にも書いてあるので、目を通しておくように。——さて、これから、休憩をはさみ演習を行う。場

所は第二演習場。時刻は一五三〇時、集合場所は第二演習場のA Z格納倉庫前。パイロットはパイロットスーツに着替えて集合。通達事項は以上だ。質問は？」

皆を見渡し、

「よし。では、解散」

告げ、カリスタは一足早く去っていった。

それを合図としたように、うん、と伸びをする声が聞こえてくる。
「ああーつかれたー。この椅子の背もたれ硬すぎませんか？ 背中心ー」

セリナが立ち上がり、肩をほぐす。

「いきなり演習とは――何をするのでしょうか。あなた、何か聞いていませんか？」

腕を組んで座るナディアに、視線を向けられたマヤが答える。

「さあ……私も聞いてないんです。ああ、それよりメツテルニヒさん、あのナイツ・オブ・トリニティに在籍していらしたんですか？」
「現在形で在籍しておりますわ。こちらへはあくまで出向という形をとっていますもの」

「ああ、そう、気になってたんですよ、私も」

二人の間に、文字通り首を突っ込むのはセリナ。

「アマツって、トリニティとは別の企業ですよ？　なんで別の企業からパイロットを呼び寄せる必要があるんですか？」

ああ、それは――とナディアは一瞬、もしかすると本人も意識していないかもしれない、というような、わずかな変化を表情にあらわしたが、それは一瞬で消え、自信に満ちた表情で胸を張る。

「トリニティは世界最大の企業ではありますが、それは総合の話。A Z関連で世界の先に行くアマツの技術はトリニティとて欲しくないわけがありません。また、アマツもトリニティと提携することによって資材の確保が容易になったり、他業種の技術を吸収することが出来ます。両者に利があるため、この二社間の一部で提携契約が結ばれたのですわ。そしてアマツの技術開発の発展を手助けするた

め、優秀なA Zパイロットである私がここへ出向することになったのです」

「つまり、メッテルニヒさんは両社のかけ橋っていうことですか？
すごいですね」

尊敬します、と無邪気に笑うマヤ。

「ナディアで結構ですわ。——その貴方、わかりまして？」
なぜか、ナディアの視線がこちらに向けられる。

「どこぞの一警備会社から来た貴方とは、格が違いましたよ」

「ああ、まあ、あんたが凄いことはわかったさ」

そうでしょう、と胸を張り髪を掻きあげる。慣れているのか、無意識に行った動作のように見えた。

「だがな」

「……なにか？」

いぶかしむ目つきを真正面から見返し、ミサキは唇の端を曲げた。
「俺はあんたの実力を見たわけじゃない。虚勢じゃないんだろうが、別に世界一のA Z乗りってことじゃないんだろ？」

「私を、愚弄するおつもりで？」

怒りの火がナディアの眼中に灯った。

「そういうわけじゃないけどな」

正直な話、ミサキはナディアの出自がどうだろうとあまり興味はない。ただ、自分の所属している会社を「どこぞの」などと言われて黙っている性分でもない。

「ま、俺よりは上手いんだろ？ どこぞの警備会社勤めでしかない俺よりは」

強調され、ナディアはようやく自分の言葉に気付いたようだが、非を大人しく認める正確ではないことは迷子の件でもう十分わかっている。予想通り、眉を怒らせてナディアは返す。

「当然ですわ。今日の演習がどのような内容かは存じませんが、どのような内容であろうとも、貴方を打ち負かして差し上げましょう」
「そうかい。期待してるよ——お先に失礼」

背を向け、カリスタが閉じて行つた扉を開く。

「なんなんですか！？ あの態度は！」

憤慨して扉を睨みつけるナディア。宥めるようにセリナが言う。

「まあ、落ちついて落ちついて。初日から仲たがいしちゃあダメですよ」

「別に、仲たがいなど……！」

「まあまあ。ともあれ、時間もあまりありませんし、更衣室に向かいましょう。ね、マヤさんとフィアさんも」

同意を求めるように二人に声をかける。二人は異口同音に頷いた。
「はい」

「ああ、私、パイロットじゃないんですけど……ううん、とりあえずお供しますよ」

「ほら、みなさんこう言ってますし。ささ」

セリナがナディアの手を取り、立ち上がらせて扉の方へ連れていく。背中を押すようにマヤが続き、一歩離れてフィアが追ってくる。机の上の荷物を取り、部屋の外へ。

「ところで、皆さま、道は解りまして？」

「大丈夫ですよ。端末に地図ダウンロードしておきましたから。ああ、こっちです」

セリナは小型の携帯端末の画面を見せる。

「そんな便利なものがありましたのね」

「入口の事務のところで入れてもらえますよ。コピー・移動は不可ですけどね。これがないとどこにトイレがあるかも解りませんよ」

「そもそもどうしてこんな複雑な作りをしているのです、この建物は」

それは、と声をあげたのはマヤ。

「機密保持のためらしいですよ。ここ、結構いろいろと取り扱ってますから、万が一スパイが入り込んでも逃げづらいように。重要な設備の中には地図に所在地が書いてないものともありますし」「なるほど……」と言いたいところですが、それで私がワリを食うのはいただけませんわ」

腕を組むナディアの横で、セリナは端末を操作しながら言った。

「だから、しばらくの間は地図は携帯必須ですよ。あとで一緒に取りに行きましょう」

「他の皆さまは？」

「私は、まあ、ここにきて結構長いので。知らない場所もありますけど、流石に迷うことは、あまり……」ファイアさんは？」

全員の視線をファイアは人形のような瞳で受けた。

「問題ありません」

一言、それだけで口を閉じる。続きを待つように全員が無言でいたが、ファイアが口を開くことはなかった。根負けしたように、セリナが口を開く。

「……ああ、いえ、どうして問題ないのかなー、て」

「暗記しています」

「暗記？ この無駄に複雑な内部構造を？」

「はい」

「どうやって？」

マヤの問いに、瞳だけを動かしてマヤの顔を見る。

「壁に、地図があります。見ました」

「——見覚えたと？」

「はい」

こともなげに言われれば、返す言葉も無い。セリナが半分呆れたような声を出した。

「そりゃあまた、大した暗記力ですねえ」

「ありがとうございます」

「ああ、いや、どーいたしまして……」

どうにもペースのつかみにくい相手だな、とセリナは内心で冷や汗を流す。

「ん、その角を曲がったところに更衣室がありますね。第六課用のロッカールームです——狙ってませんよ——ええと、中で二つに分かれてて、私たちは右側ですね」

第二演習場は研究所の建物を背後にした、ただっ広い敷地をコンクリートで舗装しただけの、滑走路のような場所だった。ところどころに白線が引かれていたりするのもその印象を強くさせる。

手前には格納庫と管制塔のような建物があるが、その先は延々と広がる灰色の海原のようだ。

「ああ、ミサキさん、早いですね」

AZ格納庫の閉ざされた扉の前で軽くストレッチをしていたミサキに声をかけて来たのはセリナ。

彼女はミサキと同じようなデザインの支給品のパイロットスーツを着込んでいる。

「けっこう広いところですねー。なにも無い殺風景さがまたなんとも」

額に手を当てて遠くを見る仕草をするセリナに、ミサキは問う。

「他の人たちは？」

「マヤさんとは更衣室の前で別れました。ナディアさんとフィアさんは、まだかかるかもしれませぬ。ちょっと興奮気味で、走ってきちゃって」

たはは、と快活に笑うセリナ。

「で、どうです？ あいつの様子は」

「あいつ？」

「ナディア・メッテルニヒですよ。怒ってました？」

セリナはこめかみを搔く。

「だいぶ憤慨はしてみたいですな。お二人の間に何があったかは知りませんが、先に挑発したのはナディアさんですし、そのあたり中々理不尽ですけど、ま、彼女の方にも事情があるんでしょうし——ここは初日ってことで、流してあげてくれませんか？」

「別にこっちは怒ってるとかそんなのは……まあ、ないことはないですけどね」

セリナと目をあわせず、地平線を見ながらミサキは呟いた。

「あいつが謝るってんなら別にこっちは——」

「謝る？ 誰が、誰に？」

ミサキの台詞にかぶせるように声が走る。見れば、件のナディアが腕組みし仁王立ちしていた。その背後には影のように立つフィアの姿。

「名前を聞くことも無いதாகが一企業に対し、その通りのことを言っただけですわ」

「流石は世界一の大企業、社員教育も立派なようだな。互いの腕もわからないのに既に相手を見下すかよ」

売り言葉に買い言葉。そんな二人を見、セリナはため息をつく。ため息に応えたように、重い音が響いた。全員の視線を集めながら、背後の格納庫の扉が上がっていく。

「全員、いるようだな」

コンクリートを踏む音を連れ中から現れたのは制服姿のカリスタ

とマヤ。鋭い視線に四人は背を伸ばし一列に並ぶ。

「演習の時間だ。手始めに、諸君らの腕を見せてもらいたい」

「腕を——どうやって？」

呟いたセリナに一瞬視線を向けるカリスタ。

「操縦者同士、一対一で戦ってもらう。模擬戦だ。訓練用のペイント弾が腹部に命中するか、格闘戦で相手を追いつめることを勝利条件とする」

一瞬、緊張が走りぬけた。

「対戦順序はこちらで決めさせてもらった。まずはミサキ・トウザキとナディア・メッテルニヒ。両名はこと——」

右手で少し離れた格納庫を指し、

「あちらで待機しているAZの各種設定を自分用に調節し、好みの武器を整備員に言って借り受ける。」

開始は三十分後。私と他の六課メンバーはその管制塔で見学だ。以上。質問は？」

はい、とセリナが手を挙げる。

「格闘戦で相手を追いつめるって、具体的には？」

「基本的には相手のコクピットに兵装をつきつけるか、相手の武器を全て奪えばいい。勝敗が決まったかの判断は私が行い、その際には合図を飛ばす。他には？」

——よし、では、両名は準備を。それ以外のものは私とともに管制塔へ」

1 - 5 ミサキ vs ナディア

外よりもややひんやりとした空気の溜まった倉庫の中に、一機のAZと数台の作業用車両、それに十人ほどの作業着姿があった。彼らは一斉に倉庫に入ってきたミサキに目を向ける

。気圧されたように歩みをとめたミサキに、一人の作業着姿が近寄って来た。

「ども、第四課第二班の班長、シゼル・ミロスです。貴方が、この子のパイロットですか？」

そう言つて、ミサキの前、彼女の背後にたたずむAZ——アマツ社の「トツカ」だ——を振り返つて見上げる。つば付き帽子的下、後ろで一本に編まれた灰色の髪が揺れる。

「はい、第六課、ミサキ・トウザキ。よろしくお願いします。ええと、第四課っていうのは——」

「第四課は、各種機材の整備が仕事です。ウチと一班、三班が主にAZの整備を承るので、これからもいろいろ顔を合わせることが多いかもしれませんね。だもんで、そんな硬つくるしくしくなくても結構ですよ」

よろしく、と差し出されるのは厚い手袋に包まれた手。それを握り返し、ミサキは口を開く。

「よろしく。で、今から模擬戦だが、整備の状態は？」

「そつちの課長から連絡は受けてます。そうでなくてもウチの子たちはいつでも万全の状態ですけどね。あとは、必要な整備を教えてくださいなければ、まー、大抵の装備なら十分で用意できますよ」

「子たち……？」

「AZは整備士にとつちゃあ兵器であるとともに子供みたいなもんですからね」

言い、シゼルはノート型の情報端末を差し出した。画面に文字が流れていく。

「とりあえず、今つかえる装備はリストアップしておきました。これ以外だと、ちょっと時間がかかるかもしれないです」

受け取り、ざと目を通していく。見慣れたもの、知らないもの、アマツ社だけでなく各企業の装備がそろっている。端末のタッチパネルに指を走らせつつ、ミサキは軽く眉をあげた。

「結構な数だな。これ、整備とか維持費とか大変じゃないか？」
するとシゼルは目を弓の形にして返す。

「ここは研究所ですからね。各企業のパーツや装備は結構な数揃ってますよ。その分人も金もかかりますが、必要経費ってことで。ほら、さくつと選んじやってください」

催促され、ミサキはあらかじめ考えておいた幾つかの武器にチェックをいれ、端末をシゼルにもどす。目を通したシゼルが端末を操作すると、辺りの作業服姿が動き出した。

「じゃあ、持ってきて訓練用のペイント弾を装填しときますから。今回はハードのチューンは特に行わないとの事ですので、ソフトの方、自分の使いやすいように設定できます？」

「ああ、大丈夫だ」

元の会社ではA Zの数に対してパイロットが倍以上いたため、各々が逐一設定を書き換えていた。当然、ミサキも設定の書き換えは手慣れている。

「じゃ、その端末でお願いします」

指さされた端末は人間の腰ほどの高さの台に置かれたノート型で、ケーブルでA Zのコクピットに繋がっているようだ。起動させ、各種の設定の数値を変更していく。コンソールを操作するミサキの横では、慣れた手つきで兵装が運ばれ、A Zに装備されている。

試合の十分ほど前には、全ての準備が整った。

「いい手際だな」

「そうですか？ ありがとうございます」

独り言だが、隣で監督をしていたシゼルには届いたようだ。

「ま、こちららプロですから。職分は果たしますよ。――ですから、

そつちも、よろしくお願いしますね」

「そつち？」

「向こうの格納庫は、一班の連中が整備してるはずです。別に対抗心とかってわけじゃあ無いですけど、やっぱり自分たちの整備した子に勝ってほしいじゃないですか」

眉を立てたナディアの顔が脳裏に浮かぶ。どれほどの実力かはわからないが、

「出来るだけのことはやってみるよ」

言つて、ミサキはコンソールに指を走らせる。AZのコクピットが開き、軽い金属がぶつかり合う音を立てながら鋼色の梯子が降ろされる。

「そろそろ行くかな」

梯子に手をかける。その背に言葉が投げられた。

「ご武運を。頑張つてきてくださいな」

コンクリートの海に、二機のAZが向き合っていた。

『たとえ演習といえど、手加減はなし。全力で向かわせていただき
ますわよ？』

「のぞむところだ。負けても泣くなよ？」

外部スピーカーから演習場に響くナディアの声に、同じようにミサキも返す。

『その大口、今のうちに言っておくことですわね。負け犬の遠吠え
は見苦しくてよ』

コクピットの中でこちらを小馬鹿にしたような笑みを浮かべてい

るのが見えるようだった。

電子音と共に、モニタの一部に敵機のデータが表示される。白い装甲に細い腰部、尖った耳のような二本のブレードアンテナ。こちらと同じ、アマツ製AZのベストセラー機「トツカ」。見慣れた機体だ。しかし。

「……なんだ、あの武装は」

外部スピーカーを切り、ミサキはつぶやく。

こちらが右手にライフルを持ち、腰のハードポイントにヴィブロブレードを装備しているオーソドックスな装備なのに対し、ナディアのトツカは右手に中世の騎兵のような円錐形のランスを握っている。鋭い穂先が人工の照明に輝いた。

「『トリニティ製 ヴァイスシユピース』……知らない武器だ。どこぞの方言で白い槍ってところか」

データによれば、それ以外の武器は身につけていないようだ。

トツカは、汎用性と軽量化の関係で、頭部に対人用の機関銃がある以外には内蔵武装は無い。つまり。

「近接格闘兵装のみ。舐められてんのか、それともナイツ・オブ・トリニティの様式美ってやつかな」

お互いの機体は借り物で、いじったのはソフトの設定のみ。ブースターのチューンなどはされていないはずだ。

「すると、距離を取りながら射撃で圧倒するべきか」

モニタに小さなウィンドウが出現。作戦開始時刻まで、あと五秒。

四。

三。

二。

一。

『——開始！』

広いフィールドに、管制塔からカリスタの声が響き渡る。

合図と共に、背負うような形の背面ブースターを使い、ミサキの機体が地面を削るように後退していく。

——予想通り、下がりますのね！

ナディアはモニタに照らされた唇の端を軽く舐める。
距離を取られるのは予想通りだ。こちらのランス——ヴァイスシユピースはナイツ・オブ・トリニティにのみ配備された兵装で、外部の人間が目にすることはほとんどない。

彼もそのはずだ。だからこそ迷わずに距離をとった。

「にがしませんわよ！」

ナディアのトツカの背面ブースターが煌めく。大地を蹴りつけてジャンプし、そのまま宙へ上がる。ビルの上階ほどの視点のモニタ、その下方に白いA.Z.が映った。

第二世代の視界ならばこちらは捕らえられているはずだ。証拠に、ミサキのトツカは右手に持つライフルを掲げ、後退しながら射撃をしてきた。

「空中で、そんなもの！　あたりませんわ！」

移動しながらの射撃の上、こちらは空中を飛翔している。AZの火器管制の補佐があっても、そうそう照準が合うはずがない。

事実、放たれた弾の多くは機体を掠めるか否かというところを通るだけで、直撃は無い。

機体を制御しながらランスを突き出すように構える。

——突っ込んでくるのか！？

ミサキは突き出されたランスを見て、直感的にそう思った。

あちらは空中で、降下する時に重力で加速できる。こちらは姿勢制御のために速度を落とさざるを得ないので、後退しながら最大速度での移動が出来ない。

——背を向ければ、追いつかれることもないが……！

向こうは斜め、こちらは横一直線の移動だ。互いに最大速度なら重力の加速を得た所で追いつかれはしない。

そう思った瞬間、モニタの中に小さな光が宿る。

「なに——いいっ!？」

ナディアのランスが、火を噴いた。

突然の衝撃に機体が揺れる。考えるより先に身体が動く。バーニアを駆使し、崩れかけた姿勢を立てなおす。

「射撃だど！？」

完全に不意をつかれた。歯を食いしばりペダルを操作、スケートをするように機体を大きく左右に振り、放たれる弾丸をかわしていく。訓練用のペイント弾がフィールドを蛍光色に染めていった。

モニタ上のメッセージが左肩の関節への着弾を表していた。口径はこちらのライフルと同一。実弾だったなら左腕は使い物にならなくなっていただろう。

「仕込み槍ってことかよ……っ」

近接兵装だと見せかけて、とんだ奇襲だ。必死に機体を動かしながら、モニタの映像を拡大。ランスの鍰の一部がずれるように開き、銃口が覗いている。

「くそっ！」

吐き出された銃弾の射線が脇すれすれを通り抜けていく。

「さあ、ワルツの時間ですわ！」

高揚する気分の中で、ナディアは言い放ち、トリガーを引く。一発、二発、掠めたペイント弾が地面に花が咲くように染めていく。

最初の一撃からの相手の立て直しは見事だった。

奇襲で体勢を崩したにも関わらず、次弾を避けながらバーニアの

操作でバランスを立てなおすことは、それなりの腕がなければ出来ないことだ。

不慣れな者ならば慌ててさらに体勢を崩すか、立ち止って蜂の巣にされているところだろう。

モニタの中、相手は右半身を前、左半身を後ろにしたやや横向きの体勢で移動している。

前方からの射撃に対して被弾面積を減らすためだ。さらに機体の移動ルートもランダムに左右に振りまわし、予測しにくい軌道を取っている。

知識ではなく経験で、座学ではなく実践で得た動き。

「だからといって——いつまで避けられるかしら!？」

こちらは追う側で、いくら広いといってもフィールドには限界がある。射撃戦が続けば、いつかは追いつめることができるのだ。

——まあ、そうなる前に、コクピットに直撃するかも知れませんか！
れど！

アマツ社製AZのコンピュータは優秀だ。いくらランダムに動こうと操縦しているのが人間である限り「癖」は出る。

コンピュータはそんな敵の回避の癖を分析し、予測をたてて照準を補正してくれる。

「せいぜい逃げ惑いなさい！ 私の勝利は揺るぎませんわ!」

「やりますねえ、二人とも」

管制塔のモニタで観戦していたセリナが呟いた。流れ弾を考慮し

てか、管制塔には窓がなく、外部に設置されたカメラの映像から演習場の様子を覗う仕様になっている。

モニタの前にはカリスタが座り、その後ろにセリナ、マヤ、フィアが立つ。

「わかりますか？」

「それでも、結構実践くぐり抜けてますからね。あれだけぶれない動きが出来るのは、いい腕してる証拠ですよ」

小声で問うマヤに、同じく小声で返す。フィアはそんな二人には興味がないように、画面を瞳に映らせている。

「空中から撃つので、難しいんですよ。下を見ながら撃ちますから、回避とか、地面にいる時とは視点が違って、動く時にバランスがとりにくいんです。高度の把握もしにくいですね。」

今、ナディアさんは後退するミサキさんを追うように飛ばしてますけど、ただ飛んでるわけじゃなくて、かわすために上下左右に移動するでしょう？

あれの切り返しが上手いかないと、一気にバランスを崩して動きが止まるか、最悪墜落——韻を踏んでますね——しちゃうんです」

「はあ……なるほど」

モニタのナディアは相手を翻弄するように蝶のような飛び方をしているが、一見優雅にすら見えるそれは水面下であく白鳥のようなものということだろうか。そんなことを思うマヤに、セリナが続ける。

「対してミサキさんですけどね。ブースターを使って後退すること自体が中級者くらいのテクニクです。」

背負ってるバックパックみたいなのがメインのブースターなんです、前進する時は見をかがめる感じで上半身を前に突き出して、後退する時はのけぞるようにして使用するんです。

立ったままだとロケット見たいに飛びあがっちゃう。で、んー、マヤさん、自転車って乗ったことあります？」

「自転車って、あの、自分でペダルをこぐ骨だけの二輪車ですか？」

「そそ。あります？」

「すみません。私、電気自動車か徒歩ばかりで……」

「そうですね。私が生まれたところは車が走れないほどごちゃごちゃしてて、結構主流だったんですが——って、そんなことはどうでもいいですね。」

ともあれ、あれをのけぞって扱ぐのが後退する時のイメージなんですよ。ああ、自動車の運転席のシートを思い切り後ろへ傾けてバツクする感じ、っていえば解ります？」

「それならなんとか——」

で、とセリナは両腕で何かを持ち上げる動作をした。

「私より技術屋のマヤさんのが詳しいかもしれませんが、A Zは基本的に操縦者の動きをトレースして動くでしょう。」

こう、荷物を持ち上げる時には、中の人も同じように腕をあげてるわけです。つまり、のけぞって後退してる時、中の人もあれに近い体勢になってるんです。

この体勢だと、普通に立ったり歩いたりしているときは視界が全然違うんですよ。地面との距離がつかめない。下手すると、それこそロケットを水平に撃つみたいにブースターの推進力が全部真横にいつて吹っ飛んでっちゃう。

地面と背中との角度を六十度くらいに保てるように体勢を維持しつつ、さらに相手の弾をかわさなくちゃいけないんです。移動までは中級者ですが、実践で慌てずに回避まで出来るのは経験値溜めた上級者ですよ。

さすが、わざわざ呼び集められたパイロットだけありますね」

マヤは、はあ、とため息ともなんともつかない物を口から吐いた。「すごいですね」

「ナディアさんは自信相応、ミサキさんもそれに噛みつくだけのことはありますね。まあ——」

腕を組み、静かに燃える炎をともした瞳でモニタに目を移す。

「いい腕です。でも、それくらいじゃないと困りますね——私と組

むというんなら」

今、なにか？——とマヤがセリナの顔を見る。見返すことはせず、モニタを注視したまま、セリナは呟いた。

「このまま黙って待つか——ここで動けるようなら、悪くない腕してますよ」

「千日手だな……いや、このままじゃ——追いつめられるっ」

ミサキは呟き、グリップを握る手に力を込める。直前に腹部があった空間を射線が通る。相手の射撃の精度が増していた。こちらの動きを分析されているのだろう。

対して、相手の動きは空中の三次元的な軌道で読みづらい。直撃をもらうのはこちらの方が先になる可能性が高い。

「飛び回りながらこの精度。いい腕だな、くそ！」

態度相応の腕を持っていることは認めざるを得ない。だが、だからといってあつさりと負けるのは矜持が許さない。

また一撃、右足のふとももにペイントの擦った線が書きこまれる。直撃を貰うまで、時間はあまりないだろう。

「モロに食らえば姿勢が崩れる——そうなる前に……！」

視線を移す先は、第二階層の天井を映す頭上のモニタ。

「一発、仕掛けてみるか！」

声と共に、ペダルを踏み込む。

「——飛んだ!？」

ミサキのA Zが後ろ向きのまま地を蹴り飛び上がったのを見て、不意をつかれたナディアは小さく驚きの声をあげた。

あげつつ、身体は相手の射撃をよける動きを勝手にしてくれる。それだけの経験と訓練は積んでいる。

「なにか策でもあつて!？」

撃ち返す弾は、先ほどとはうつて変わってかすりもしない。相手の位置座標が大幅に変わったせいでコンピュータによる補正がりセツトされてしまっている。

——そういうことなのです……!？

舌打ちし、ランスから銃弾を放ちつつ右手へ機体を移動させる。

「空中戦、望むところですね!」

相手も同じく右回りの軌道を取っている。結果は、互いに向き合った形での円を描くような軌道の射撃戦だ。

互いの機体の脇を銃弾が掠めていくが、決定打には程遠い。

——せめて一発直撃させればっ

体勢を崩して隙を作ることが出来れば圧倒的優位に立てる。同じことを相手も考えているだろう。

右回りに、上へ下へ、高度を変えながらも、敵機はモニタの中央に収めている。振りきれず、振り切らせない。互いの技量はほぼ互角か。

——そんな、冗談ではありませんわ！

歯ざしりするナディアをあざ笑うかのように、わき腹を銃弾が掠めていった。

ナイツ・オブ・トリニティの名を汚すような真似をするわけにはいかない。こんなところで、どこの誰ともわからないA Z乗りに負けることなど、ナディア・メッテルニヒの矜持が許さない。

「格の違い——思い知らせて差し上げますわ！」

『覚悟！』

なにかのはずみでスピーカーのスイッチが入ったのか、演習場に響くナディアの声。それと共に、こちらの背後に回り込むような軌道でナディアのトツカが動く。対し、ミサキはライフルを連射しながらその場で回転しながらナディアを追う。

ミサキの機体が一周半ほどした時、ミサキを中心に円を描くような動きを取っていたナディアの機体が、一気に高度を下げた。

一瞬だけ、ブースターの出力を切ったのだ。重力に引かれた機体は斜めの直線を描いて落下する。

下方に追おうとしたミサキの腕は、しかし右方向にグリップを思い切り引いた。

急な移動に見えない壁が押し寄せる。その壁の向こう側を、天を

目指す白い直線が走って行った。

——ナディアの機体……来るのは、上からか！？

迷っていれば選択肢がなくなる。確認する前に、左腕で腰のヴィブブレードを引き抜く。人間サイズならば大きなナイフ程度のブレードを、頭を守るようにして掲げる。

「一か八かだな……っ！」

衝撃。

響く重い金属音は、叩きつけられたランスと掲げたブレードがぶつかり合う時のもの。

「落ちるかぁ！」

相手の獲物の方が質量が大きく、勢いもある。激突の結果を示し、地面に向かって弾き飛ばされる機体。奥歯を噛み、フットペダルを限界まで押しこみブースターを最大稼働する。ほぼ直立で防いだのが幸いし、体勢を飛行用のそれに戻すことに成功した。

ミサキが荒い息を吐いて機体一機分ほどの高さにいるナディア機を睨みライフルを放つのと、相手がランスを構えて射撃するのは同時。

直後に相手の構えに対して反射的に機体を翻し、射線上から逃れるのもまた同時。

——これだけ激しい動きをするのは、流石につかれるな……。今はほとんど偶然で対応できてるが、このままじゃヤバいか。

考える暇を与えさせないかのように、ペイント弾が放たれる。反撃の余裕はない。上下左右に動き、直撃をかわすだけで精いっぱいだ。

幾度もの急な機体の制動は、確実に体力を奪っていく。顔を包むようなプロテクターの間から、鼻の横を伝って冷たい汗が落ちてい

った。

——叩き落とせないとはっ！

眉間にしわを寄せて、ナディアは唇を浅く噛む。不意をついた筈が、防がれ、体勢を崩すことさえできなかった。

さらにはこちらの動きを読むように、同じような射撃と回避を見せられた。

今も、何発もの弾丸を消費しながら直撃することはない。すべて、ぎりぎりのところで避けられている。

——からかわれていますの！？ この私を相手に、余裕を見せていると……！？

互角どころか、それほどまでの実力差があるというのか。ナイツ・オブ・トリニティのナディア・メッテルニヒを相手に。

ありえない。

世界最高峰とうたわれるナイツ・オブ・トリニティの訓練所を、群を抜く成績で卒業したのがナディアだ。その後も本来配属される各部隊ではなく単独行動を任され、トリニティの代表として第六課への出向を認められた彼女を易々と越えるようなパイロットなど、存在しない。

そんな存在があるわけがない。

なにかに追いつめられるような焦りがナディアを襲い、冷静さを

欠かせていく。

その「なにか」の正体を考える余裕は、最早ナディアには無かった。

——負けるわけにはいきませんわ！ 勝つのは私……それを曲げるものの存在など、ありはしません！

言い聞かせるように強く思い、ナイツ・オブ・トリニティの象徴たるヴァイスシュピースを構える。モニタに映る穂先の延長線上、白の機体が収められた。

「行きますわよ！」

——来る！？

眼前、銃弾をばらまきながらこちらへ突進してくるAZがモニタに映る。先ほどの、翻弄するような軌道ではなく、空中に引いた直線を辿るようなまっすぐな突撃だ。

「こいつ——！」

今までの致命傷——コクピット狙いの射撃と違い、乱射される弾はどこに来自るか分からない。

当たっても痛手になる可能性は下がるが、被弾率は上がるため、振動で機体の制御の難度が上がり、こちらの方が対処しづらい。

さらに、向かってくる相手の動きは直線的で先ほどよりよほど当てやすいが、こちらへ向かってくる銃弾を回避しながら撃ち返すのでは弾道がぶれ、そのうえ円錐形のランスが盾の代わりにもなり身体を隠しているため致命傷を与えづらい。

相手の機体の勢いは止まらず、こちらに一直線に突き進んでくる。得物や勢いから、中世の騎士を彷彿させる突進だ。

「いけない!？」

『そこお!』

ナディアの声が響く。

止められない。

「こ——のおおおお……っ!」

最早銃撃をしている余裕はない。

そう判断し、ミサキは思い切り機体をひねらせ、ブースターの出力を最大にする。胃がひっくり返るかと思うような重力加速度が身体を襲う。心臓の音が耳障りだ。視界が一瞬だけ赤く染まる。

フィギュアスケートのアクセルのように二回転した機体の横を、疾風の速度でA Zが飛びぬけていく。

「くそっ、とまれよ……!」

各部のバーニアを使い死に物狂いで機体を落ちつかせ、ミサキが振り返ると、機体を減速させたナディアが半円を描くターンでこちらに機体を向けるのはほぼ同時。

——さすがに、今のを二度三度やったら死ぬぞ……

いくら技術が発達しようと、外の衝撃やGを完全に殺しきれないわけではない。身体の負担を考えると、次で決めるより他はない。

『次で決めますわ。覚悟はよろしくて?』

ナディアの声がスピーカーを通して届く。

——まさか、かわされるとは思いませんでしたわ……！

コクピットの中で、ナディアは唇をかんだ。

最大加速からの一撃は必殺の攻撃だ。訓練でも実戦でも、初見であれを捌ききれた人間は少ない。

演習でコクピットを貫くわけにはいかないが、腕の一本も持つていくつもりだった。まさか、完全に避けられるとは。

重力加速が体力を奪っていくため、続けて放つのは難しい。宣言通り、次で決める。

負担に高鳴る心臓を二度の深呼吸で抑え、モニタの中を睨みつける。

「外しませんわよ！」

加速に身体が押しつけられる。勢いを殺すために相手とはかなりの距離をとったはずだが、それがみるみるうちに近づいてくる。

AZがライフルを乱射する。一発、頭部カメラに命中。

塗料によってカメラが使い物にならなくなるが、サブカメラが生きていれば大した障害にはならない。

距離が縮まる。向かってくるライフルの弾は、こちらを止める一撃にはならない。

——決めます！

もはや射撃など意味はない距離だ。モニタの中に全神経を集中。

その、前方に集中した視線が、何かを捕らえた。

——！？

弾ではない、もっと大きいもの。AZではないそれは、

——ライフル……！ 放って、視界を防ごうと！？

ランスの穂先がライフルを貫通、分かれたライフルが地上に落ちていく様が、一瞬ナディアの注意を引きつけた。

——敵はッ！？

視線を戻すと同時、ランスがミサキのAZの右上腕部を貫いく。

『捕まえたあ！』

スピーカーからの声。

「なんですって！？」

衝撃。機体が揺れる。

ランスの穂先に右腕を貫かれ——否、右腕の関節をランスに「引っ掛け」、ナディアの機体の頭部を左手でつかみ、ミサキのAZがとりついていていた。

「めちゃくちゃですわ！」

ミサキがぶら下がる形になったため、姿勢が制御できない。視界が傾く。

天地が左回りに回転した。ミサキに押し倒されるような仰向けのまま、地面が近づいていく。

「こ——んなあ！」

ブースターを作動させるが、A Z二機という推進力以上の重量を持ち上げる力はない。落下の速度が緩むだけだ。

——私が、負ける……！？

A Zが背中から着地し、衝撃が全身を襲う。喉を胃液が焼くのを必死に抑え、モニタを確認。

「あ——」

映し出されたのは、覆いかぶさり、こちらのコクピットにナイフのような形のヴィブロブレードをつきつける白いA Zだった。

1 - 6 結果と、変化と

「貴様等——初日から謹慎を食らいたいのか？ 古巣に叩き返してもらいたいのなら素直にそう言え」

「返す言葉もございませんわ……」

組み合った体勢で終了の合図を聞き、AZを立て膝の体勢にして地面に降りた、その直後にそこに座れと言われて以降延々と説教されている。

「まったく……」

悄然とうなだれるナディアから、隣のミサキに視線を移すカリスタ。見た者を凍らせる、絶対零度の視線が突き刺さった。

コンクリートの上に直接、古式な正座をさせられたミサキの足は、パイロットスーツを着ていなければそろそろ痺れを越し感覚を伝えなくなっているだろう。

「実戦のつもりで模擬戦をすることが、悪いとはいわん。だが、この調子のまま演習中にAZを扱い続けられたら、いざ出撃という時に起動出来る機体がなくなるぞ。命の取り合いをする実戦でいたしかたなく、というのなら分かるが、模擬戦で無茶をしすぎるような奴は実戦に出る前に事故で死ぬ。理解しているか？ している奴が飛行中のAZを押し倒すような真似をするとは思えないが？」

なぶるようにゆっくりと二人の頭の上を視線が通り越し、その後、立ち膝の体勢で向かい合って待機している二機のAZに向けられる。

AZの周りには整備担当者達が飴に群がる蟻のように集まり、各所を検分していた。その中から、抜け出してきた一人の女性用制服がカリスタに駆け寄ってくる。

「課長——いや、隊長。とりあえずですが、確認が終わりました」

女性、マヤが茶色の髪を揺らして片手に持った情報端末を操作する。

「装甲の大きな変形・損壊はありません。細かい傷はありますが、起動に支障はないだろう——というのが一応の報告です。ただ、精密検査のために一度格納庫に運び込んで調査したいと」

「仕方ないな。つまらない事故でも起こされたらこまる。今日の演習は——つかえる予備機はあるか？」

「問い合わせていますが、待機中の機体は『例の』試作機しかないようです」

「慣れない機体では、実力を発揮できんだろう。それでは意味がない。今日の演習は中止だ。ナカザトとアーウムラウトに伝えておけ」
カリスタの顔は端末を操作するマヤに向いているが、暗に責められているような気がし、ナディアとミサキはさらに肩を落とした。

「トウザキ。メッテルニヒ。今回は負傷者も無く、施設にも被害がなかったから不問にするが、次にあんな無茶を試してみる。首輪付きで檻に入れて輸送ヘリで古巣に投下してやる」

「はい……」

「心に刻んでおきますわ……」

疲れやら足のしびれやらで、二人とも言葉を紡ぐ気力すら残っていない。

そんな二人を一瞥し、カリスタは、

「では、解散。キサラギ、AZの回収は任せる」

「あ、はい。了解しました」

マヤに言いつけると、カリスタはコンクリートで硬質の音を立てながら、研究所の方に歩いていった。その背中が消えるのを見届けてから、マヤが制服の上から巻いたポーチから缶を取り出しながら二人に声をかけた。

「お疲れ様ですね。飲み物いりますか？」

「ああ、わるい……」

「ありがとうございます……」

感覚のない足をだらしなくコンクリートの上に放り出し、缶を傾ける。一気に半分ほどを胃に流し込み、ミサキはふう、とため息を

ついた。

「生き返るな。あとの二人は？」

「今、こっちから中止のメールを送りましたから。引き揚げて着替えてるんじゃないですか？」

「そうか……。ＡＺはどうするんだ？ 乗って運ぶのか？」

「いえ、内部に異物が詰まったりパイプの液漏れがある可能性もあるので、輸送車両で格納庫まで運び込みます。ですから、お二人とももう上がっちゃっていいですよ」

台詞をかき消すように、轟音を伴いながら巨大なトラックが荷台を牽引しながらＡＺの隣に停車した。それに回りこんだ制服姿の影が、何事かを叫びながらこちらに手を振る。

「ああ、呼んでますね。行かないと——これで失礼しますね」

「お疲れ様」

「申し訳ありませんわね。私たちのせいで」

「サポートがお仕事ですから。では、失礼します」

ぴよこん、とお辞儀をし、マヤは走り去っていった。

取り残された二人の間に、微妙な空気が流れる。

マヤを見送ったままの視線の先では、操り人形のようにクレーンで吊るされたＡＺがゆっくりと引き上げられていく。

はるか遠くのドームの天井では人工照明の明かりが輝いている。

その上には高級住宅地やアマツ社の重要施設のある第一階層、そのさらに上からは超硬度ガラス越しに傾きかけた太陽が顔を覗かせているだろう。

そんな夢想をするものの、ミサキはどのドームの第一階層も訪れたことはないし、自然の太陽の光を浴びたことも無い。ミサキだけでなく、人類の七割方は、第二階層の人工の光の下で暮らしているのだ。

「なあ、あんた」

「なんですの？」

視線を向けるミサキに、地面に缶を置いたナディアが顔はＡＺの

方に向けたまま、視線だけをこちらに移す。

「あんた、自然の太陽つてみたことあるか？」

「なにを言っていますの？」

「ナイツ・オブ・トリニティほどの組織なら、第一階層に施設があるんだろ？　だったら太陽を見たことがあるんじゃないか、と思つてな」

「——人工照明と変わりませんわ。朝方に明るくなり、夕方には暗くなつていく。そのサイクルにあわせて球体が移動するだけですもの。大したものではありませんわ」

「見たことがあるだけで羨ましいさ。さすがナイツ・オブ・トリニティ出身のエリート様だ」

ナディアは顔を俯ける。前髪に隠れ、表情が見えなくなった。

AZの片方がゆつくりと荷台に降ろされていく。注意を促すような声が、作業の音に紛れている。

「先ほどの件は、謝罪をいたしますわ」

「——ん、なんだつて？」

聞き返すミサキに、ナディアは俯いたまま籠り気味の声でつづける。

「貴方の腕は確かです。場末の一企業と馬鹿に出来ないものがあることを認めますわ」

ミサキは眉をあげ、顔をナディアに向ける。

「勝敗どころではなくつてしまいましたが、あの勝負、私の負けです」

「そりゃ、随分と潔いな。どうしたんだ」

ふう、と肩から力を抜き、ナディアは人工の光に向けて顔を上げる。

「この敗北は私自身の奢りが招いたもの。ナイツ・オブ・トリニティという名を背負う者として肩肘を張る一方で、その名に奢つていたことに気付きましたの。たかが一企業——いや、失礼、名の知れない場所にも私と同程度の力を持つパイロットがいるのです。そ

れ以上の方も、探すことは造作も無いでしょう。そんな中で、私程度の腕で名を背負っていると思うのは、それこそ自身への奢りですわ」

一瞬、自嘲するように俯き、ミサキに向き直る。

「私は栄えある精鋭部隊ナイツ・オブ・トリニティの一員。なれば、それに見合うパイロットにならねばなりません。未熟な力を誇り、奢るなどとは言語道断。ミサキ・トウザキ——それを私に教えた貴方を超え、貴方自身に認めさせるだけの力をつけた時、私は胸をはってナイツ・オブ・トリニティを名乗りましょう。それまで、第六課所属、ナディア・メッテルニヒとして、よろしく願いますわ」
見つめられ、ミサキは、ナディアの表情が幾分優しくなっていることに気付いた。

ナイツ・オブ・トリニティという存在は、彼女の誇りであると同時に、それ以上のプレッシャーにもなっていたのだろう。自己紹介後のマヤのような、期待や尊敬の視線を向けられることも多く、肩肘を張らざるを得なかったということか。

その重圧から完全に解放されたわけではないのだろうが、それでもやや陰の取れた彼女の顔に正面から見つめられ——不本意ながら、ミサキは少々赤面した。あらためて気づく——この少女が美しいと可愛いの両方の要素を併せ持つ、所謂美少女であると。

「どうかいたしまして？」

「ああ、いや——こちらが悪かった。あんたの挑発に乗って、無駄に熱くなった。その結果があのだ。あんたが上手く着地してくれたから事なきを得たが、そうでなければ、最悪、大破炎上していたかもしれない」

赤い顔を隠すように、ゆっくりと運ばれていくA2を見る。もう夕方だ。これから夜に掛けて人工の光はゆっくりと赤く、暗くなっていく。

「相手があんたでよかったよ」

「——っ!？」

唇を緩く上げ、なにげなく呟いた言葉に反応したように、ナディアが一瞬目を見開いて顔をそむけた。

「どうかしたか？」

「いえ、なんでもありませんわ」

いぶかしむミサキの視線から顔を隠すように長い髪をいじり、ナディアが呟いた。

「そうか。――第六課所属、ミサキ・トウザキ。よろしく頼むよ、メッテルニヒさん。いままで、あんたとか呼んでて悪かったな」

「ナディア、で結構ですわ。他の方にも、そう呼んでもらっていますから」

すつくと立ち上がり、ミサキに背を向けてナディアは歩きだした。「では、お先に失礼します」

去っていくナディアを見て、ミサキも腰をあげた。うん、と大きく一度背伸びをする。

「俺も、着替えないとな」

――宣戦布告、でしょうか。

更衣室で一人、パイロットスーツを脱ぎながら、先ほどの、自分の言葉を思い返す。

ナディア・メッテルニヒはナイツ・オブ・トリニティの一員だ。それは嘘ではない。

ただ、第六課へ派遣されたのがナディアである理由が「優秀だから」というかといえば、間違っではないが正しくも無い。

ナディアの實力は、ナイツ・オブ・トリニティの中で言えばせいぜい中堅といったところだ。むろん、A Zパイロット全体としてみれば高い方に分類されるが、その高い方では決して上位にはいない。ナディアより上手いパイロットがいるのに、第六課へ向かわされたのがナディアである理由は、彼女が志願したからに他ならない。

ナディアの父も、祖父も、その父も、皆、企業の軍事力の中核を担う職についていた。父はいまでもトリニティの軍事部門の重鎮で、二人の兄もナイツ・オブ・トリニティのA Z乗りとして他のパイロットを率いている。

そんな彼らの跡を追うように、ナディアも志願してナイツ・オブ・トリニティの訓練所に入り、試験に合格して入隊することが出来た。そう、そこまでは順調だった。

訓練所では兄の名誉を汚さない為に必死で学び、トップの成績を維持。さすが、と周囲に言われ、その先へ進むことを期待され、それに応えてきた。

同期の中でも群を抜く技術でナイツ・オブ・トリニティの狭き門をかいくぐったナディアを迎えたのは、「独立騎兵」という大役だった。

通常、ナイツ・オブ・トリニティに入隊した者は、複数あるチームの中のどれかに所属させられ、そこで作戦をこなしていく。

しかし、独立騎兵というのはチームに属さない、単独で作戦に従事する兵士だ。普通はトリニティに貢献した傭兵やチームの中でも経験を積んだ者がその任に就き、上手くいけばそのままチームを率いる隊長となることが出来る。

それだけ実力が必要な任であるが、ナディアがこれに任ぜられたのは決して実力のみではない——そう、彼女自身は考えていた。たしかに彼女の技量は飛びぬけているが、それは訓練所での話。ナイツ・オブ・トリニティ全体ではその限りではない。では、なぜこんな任務につかされたのか。

——私が、彼らの娘、そして妹だから

新入りとしてチームの一番下につけることは憚られるし、訓練所を出たばかりの新人にいきなりチームを率いらせることは出来ない。独立騎兵は、いわば妥協案だった。下につけず、上につけず。どうにも宙ぶらりんなポジションのまま、ナディアはいくつかの作戦をこなしていくが、そのほとんどは他のチームの支援任務で、本来独立騎兵がこなすべき単独での任務はまったく言っていないほど任されなかった。ようするに、単独で任務をこなすことが出来るほどの実力とは見られていなかったのだ。

そんな状況にもかかわらず、ナイツ・オブ・トリニティの一員としての視線を、作戦に参加した他の傭兵や警備会社の者たちは向けてくる。ナイツ・オブ・トリニティの中ですら、事情を知らない者たちからは「いわれのない」尊敬や期待の視線を投げられる。

そんな視線が、ナディアの中に「ナイツ・オブ・トリニティの一員である」という縛りを作っていたのかもしれない。自分がナイツ・オブ・トリニティに所属しているということを過剰に意識し、肩肘を張り、それがいつしか空虚な実力を誇る奢りに変わっていたのだ。その奢りは不満も伴っていた。これだけの実力がありながら、独立騎兵としての作戦をまったく任されない状況に苛立ち、そこに第六課への出向募集を見た。

ナイツ・オブ・トリニティの代表として、世界最先端のA Z技術研究所への出向。

任されないのならば自分から——そう考え、ナディアは人事部へ

駆け込んだのだ。

——その出向先で、きっかけになった奢りに気付かされるとは

訓練所では自分に並ぶ者はなく、その後は実力を測ることの出来るような難関や強敵に当たることなかった。今日、あのミサキ・トウザキによって得た敗北の経験は、訓練所のごく初期の頃以来、久しく得ていないものだった。

——彼が、気づかせてくれたと言っているのかしら

自分の状況を再確認すると、出向が認められたのも彼女の實力というより、重鎮の娘だからだという気がしてきた。

本当に實力のあるパイロットを送り込むつもりならば他の適任者がいるだろう。企業間の契約の裏を考えると、この人事はむしろ人質に近いものかもしれない。貴重なパイロットなど、重要な人物を差し出すことによってアマツが他の企業と手を組むことを牽制しているのだ。

その点、自分は重鎮の娘で、表向きの理由の人材支援としても悪くはない。これ以上ないほどの適任だったのだ。もしかすると、彼女が志願しなくても話が回って来たかもしれない。それこそ彼女は「ナイツ・オブ・トリニティの代表」に好機と飛びついただろう。

——企業のかけ橋どころか、人質だったとは……

だが、いまさら気にはならない。ここにはミサキという、彼女の目を覚まさせた人間がいる。目下の目標は、彼を超えることだ。誰かの視線に応えるのではなく、自分自身に応えるための目標だ。

「ミサキ・トウザキ……」

——認めますわ。私のライバルとして

彼の、どこか軟弱ともいえる顔を思い浮かべると、なぜか体温が上がった気がした。

それを彼女は、初めて対等に接することが出来る相手を見つけた興奮からのものとして受け取った。

制服を着終わり、ぎゅっ、と気合いを入れるように拳を握ると、更衣室に電子音が鳴り響く。

「メール？」

宛先はアマツに登録した仕事用のもの。送信者は登録されていない。用件は短かった。

『今夜、食堂で食事でもどうですか？ 適当に席とって待ってます。』

第六課 セリナ・ナカザト』

——ミサキさんも来るのでしょうか……？

ナディア一人にメールを送ってくるとは考えにくい。すると、他のメンバー——ミサキにも誘いは行っているはずだ。

——ライバルと認めるからには、相手の視察は基本ですわね

ナディアは返信の文章を打ち込み始めた。末尾の送信者名は、「第六課 ナディア・メッテルニヒ」。

食堂は、きれいなレストランといった風情だった。幾何学模様の淡い色の壁紙が張られた広い室内には、必要以上の感覚をあけて椅子とテーブルが設置され、会話の妨げにならない程度の大きさでスローテンポな音楽が流されている。入口には「全席禁煙」の立て看板。

簡素な長テーブルと椅子が並ぶだけの無機質な空間を思い描いていたミサキは内心で驚いたが、あちこちに座る制服姿を見て、研究所の食堂だと安心し、踏み込んだ。

ずばらなのかファッションなのか、制服の上に白衣を着たまま力ウンターでコーヒーを飲んでいる男性、サラダをつつきながら談笑に耽る女性たち、四人掛けのL字ソファアのテーブル席で立ちあがりこちらに向かって手を振る制服姿——の顔には見覚えがあった。

「セリナさん。あんただけか？」

「ナディアさんとマヤさんはあっちのフリードリンクコーナーで紅茶淹れてます。ミサキさんが最後ですね」

ささ、と奥に詰めるように席を空ける。ミサキは空いた空間に腰をおろし、携帯端末を取り出しながら尋ねた。

「ん、フィアさんだっけ？ 彼女は？」

「更衣室で誘ったんですけど、断られちゃいました」

嫌われましたかね、とたいして気にする素振りも無くセリナは快活に言った。ミサキはフィアの無感動な顔を思い出す。話をしたことはないが、あまり付き合いたいようには見えなかった。

「課長は？」

「事務用の連絡先を私用で使用するなって——ああ、ギャグじゃないですよ、偶然です——怒られて、私がいると気を使うだろうって断られました」

「ああ、あの人はそう言いそうだな」

応えながら端末にダウンロードしたメニューを見ると、半年はかぶらずにローテーション出来るほどの数の料理名が並んでいた。ミ

サキは軽く眉をあげた。

「ああ、凄いでしょう？ 私も驚きました。なんせこちとら日銭稼ぎの傭兵稼業でしたからね。一週間ずっと保存食糧の食事に比べたら天国ですよ」

「確かにこれは凄いな。前の食堂は両手の指で足りたんだが……」

「流石アマツ、A Z 関連で稼ぎまくってますね。遅めの昼食をここで食ったんですけど、味もいいですよ」

「そりゃ楽しみだな」

そう言つてメニューを物色し始めたミサキの携帯端末の画面に影がかかった。見上げると、鮮やかなブロンドの髪。

「ミサキさん、申し訳ありませんが、詰めてもらえまして？」

「ん、ああ、すまん」

湯気の立つカップを両手に持ったナディアのために、ミサキとセリナはL字型のソファアの端へと腰を移す。カップを置いて座るナディアに続き、同じく両手にカップを保持したマヤがミサキとセリナの前にそれらを置いてナディアの隣に腰をおろした。

「すいませんね、パシらせちゃって」

頭を軽く下げるセリナに、ナディアは疑問符を浮かべた。

「パシ——なんと？」

「使い走りですよ、いや、ナイツ・オブ・トリニティの方にそんなこと頼むのも心苦しかったんですけどね」

「構いませんわ」

社交辞令でなく、本当に構わなそうな、むしろ頼まれたことに喜びすら感じさせるようにナディアは爽やかに言った。

「同じ第六課の間ですわ。それに、誰かがここで席を確保してなければならぬのです。役割分担ですわ」

「はあ……そう言っていたけると助かるというか。うーん——ナディアさん、なにかいいことでもあったんですか？」

どうも腑に落ちないという表情をしたセリナが尋ねるが、

「別に、なにも。貴方がたは同僚ですもの。仲たがいするよりは、

仲良くいたしましょう?。」

「そ、そうですね——うん、それがいいですね。仲良く……うん……」

どうにも、模擬戦までのナディアと様子が違う気がする。前は、もっと尖った印象があったような。

——ま、あつたばかりですし、第一印象なんてアテにならないことが多いですし

セリナは深く考えず、心の中で疑問を流した。カップを持ち上げ、「では、第六課初日、御苦労さまでしたってことで——乾杯!」

乾杯、と祝賀の声が重なった。

1 - 6 結果と、変化と（後書き）

ギャルゲちつくな強引な展開。

まあ、気にしねーって人だけ着いてきてくださいな。

2 - 1 試作兵器

高解像度のモニタに広がるのは一面のコンクリートの灰色。そこに、一直線を描く光が走っていく。

『命中。ターゲット4の消滅を確認』

モニタに流れる文字を横目で見、機体を半歩ずらす。モニタに映った人型のバルーン——モニタ上ではターゲット5と認定されている——を視界の中央に収め、グリップの引き金を引く。

『命中。ターゲット5の消滅を確認。——全ターゲットの消滅を確認』

「よし、と」

つぶやき、ミサキ・トウザキは軽く息をついた。

『お見事です、ミサキさん。今日の訓練はここまでです』

スピーカーから、管制塔にいるオペレーター、マヤ・キサラギの声。

「了解した」

機体を反転させると、人工の夕日——の色をした照明——に赤く照らされた第二演習場の倉庫が見えた。

機体が倉庫に入ると同時に分厚いシャッターが轟音を上げながら降りていく。それを聞きながら、ミサキは膝をついた状態で照明を浴びるトツカのкокピットから降り立った。

駆けてくる人影は第四課第二班の班長、シゼル・ミロス。いつも通りの作業着姿に身を包む、ミサキより頭一つ分背の低い彼女は、薄い情報端末を差し出しながらミサキに言う。

「どうです？ トリニティ製は」

ミサキは端末を受け取りつつ、床に置かれて改修されつつあるAN用のライフルに目をやる。

「アマツのよりも反動が大きいな。威力はあるんだが」

「ほぼ同レベルの武器ですが、口径が大きいのと、制御技術の違い

ですね。反動制御とかそつちのはアマツが先駆けてますから。で、どうします？ あつちのがいいって言うなら、これからは特に言いつけがない場合には先ほどのライフルを装備させておきますけど」「いや、今までのでいいよ。多少威力が上がっても、反動が大きくなる移動しながら撃ちにくくなるからな」

「そうですか？ それはよかった。実を言うと、トリニティ製はやたら機構が複雑で整備がめんどくさいんです」

言葉に、ミサキが脳裏に浮かべたのはナディアの仕込み槍だ。確かに、構造が複雑そうではある。

「じゃあ、これからも基本的に装備はアマツ製を使うことにするよ」
「いえいえ、とシゼルは大仰に手を振った。

「こつちの事情ですから。そちらはそちらの事情で選んでください。——ええと、私はちよつとA Zの方を見てくるので、これで。とりあえず端末で簡単な報告と確認だけ済ましたら帰っちゃっていいですよ。お疲れさまでした」

「ああ、お疲れ様。お先に失礼するよ」

トツカに走り寄るシゼルに手を振り、ミサキは端末にペンでチェックを打っていく。

幾つかの項目に備考を書きこみ、懐中時計を取り出す。他の六課の皆も、個々の訓練を終えているころだろう。

以前の一対一の演習から二週間ほどが経ったが、あれ以来訓練が終わった後に皆で夕飯を食べるのが日課となっている。ただし、皆といってもフィアとカリスタが姿を現したことはないが。

——先に席、取っておくか

時計を再度見、食堂の席を確保すべく飛ばし気味で端末に目を走らせていく。

轟音が、耳を打つ。外部スピーカーが拾った、金属が金属と、もしくはコンクリートとぶつかり合う音だ。

眼下に広がるのは打ちっぱなしのコンクリートが広がる第三演習場。その管制塔で、ナディア・メッテルニヒはかなりの時間、瞬きを忘れ、金髪に映える青の瞳が乾くことも気にせずその光景に見入っていた。

そこにいるのはナディアだけではない。モニタの前に座るのは六課課長のカリスタ・ロング。その後ろ、ナディアの隣には同僚のセリナ・ナカザトも同席している。セリナはナディアと瓜二つの表情をし、滅多に感情を見せないカリスタまでもが心なしか眉と唇を軽くをあげてモニタを注視していた。

管制塔内の無数のモニタには、幾つかの方向から金属の残骸が映し出されている。それは、アマツ社製第一世代機『イクタチ』の、腹部から胸部にかけてが高熱に貫通され崩れ落ちた姿だ。少し離れた場所には千切れるように吹き飛んだ左腕が無造作に転がっている。

AZに詳しいものが見れば、目の前の光景を許容することが出来ないだろう。イクタチは第一世代、旧世代のAZだが、第二世代との差別化のために機動性を犠牲に装甲を強化した機体で、こと正面からの攻撃に対しては全AZ中でも（正規品のみならば）一、二位を争う防御力を誇っている。それを、たった一発で貫通するのは、大型のロケット砲ですら怪しいという威力だ。

それを為した武器が、残骸から離れた位置に膝立ちになったトツカに構えられていた。

AZ用の対物ライフルと同程度かそれ以上といった長い砲身は、長方形の形をしており、まるで玩具のブロックで作ったような角ばったシルエットだ。

『管制塔。目標の撃破を確認。指示をお願いします』

静寂を破るように、無感動な声が響いた。管制塔に通信するのはトツカのパイロット、ファイア・アーウムラウト。ナディアと同じ六課のメンバーの少女。

声に、我に返ったように、カリスタが動いた。彼女はマイクを手に取り、ファイアに指示を出す。

「機体に異常はあるか？」

『——ありません。砲身の放熱速度も問題ありません』

「よし。こちらのモニタにも異常は確認されない。——テストは終了だ。機体を倉庫まで運んで、作業員の指示に従ってくれ」

『了解しました』

通信を切り、カリスタが椅子を立ててナディア達を振りむいた。

「テストはこれで終わりだ。お前たちもあがっていいぞ」

「え——あ、はい。分かりましたわ」

言われ、ようやくナディアの視線がモニタから離れた。セリナも同時だった。

「ええと——お疲れ様、でした。今日はこれで終わりですか？」

「あがっていいと言っている」

はい、と返事をし、カリスタに背を向けて部屋から出る。出入り口と地上から直通のエレベーターの扉を兼用しているドアを抜け、演習場のコンクリートを踏み、ようやくナディアは

緊張をほぐすようにため息を吐いた。

「ふう。——アマツ社の新兵器、あれほどの威力とは。流石ですね」

「プラズマライフルでしたっけ？ 子供のころに読んだ本で見たこととありますけど、まさか実用化されるとは夢にも思いませんでした」

た」

暗い闇に飲まれかけた色の空を見上げ、セリナは汗をかいてもいない額をぬぐう。

「まだ試験段階とか言ってますけど、あんなものが出回ったら兵器業界がひっくり返るんじゃないですか？」

「トリニティでも同様の兵器が開発されているという噂を聞いたことはありますが、聞くのと見るのでは大違いですわね」

互いに感想を洩らしながら、研究所の方に足を向ける二人。セリナが制服のポケットから情報端末を取り出し操作する。

「あ、ミサキさんから連絡入ってます。いつもの席は確保したって。マヤさんも一緒のようですね」

「では、急ぎましょう。待たせるのも難ですから」

「フィアさんはどうします？ 声、かけておきますか？」

そうですね、とナディアは顎に手を当てて考える仕草をした。

「何度かお誘いしましたが、いつもお断りされていますし——無理に誘うのもよろしくないのでは？」

「でも、誘われないってのも寂しいでしょう。」

「そうかしら？」

ナディアはフィアの筋肉の動かし方を知らないような無表情を思い出した。

「あまり、気になさる人とは思えませんが」

「ま、ダメ元で。ちよつと無駄働きしてきますから、ナディアさんは先に行ってください」

「あ——ちよつと！」

言っと、倉庫に向けて走り出すセリナ。ナディアはその姿を見送りながら自分も追うべきかを考え、

「あまりミサキさん達を待たせるのもよろしくありませんわね」

食堂のある研究所に足を向けた。

フィアを見つけるのは容易だった。A Zの格納された倉庫の出入り口に足を踏み入れた先、パイロットスーツ姿のフィアと制服を着た年配の男性が端末を片手に話し合っていた。

「確かに、そのあたりは難しいな。整備の俺たちには現場の判断に任せるとしか言いようがないが……破壊力はいいつの売りの一つだが、出力を落とすことで多少は改善を見込めなくはないな」

むむ、と顔をしかめる男性。大柄な彼とフィアの間には頭一つ半ほどの身長差がある。

「そのあたりは、今後の調整次第でしょうか。開発部の方とも話をする必要があると判断します」

「そうだな。そっちの課長にも伝えておいてくれ。他に気になったことは？ 異音とか、異常加熱は？」

「そのようなものは確認していません。気になった点は先ほどのことぐらいです」

そこで、フィアの黒曜石のような瞳がセリナの方を一瞥した。

「ほかに、なにか？ 無ければこれで」

「ああ、そっちにないなら無い。あとは機体のデータを参照してみないとな。何かあったらそっちにも送っておく」

「はい。お願いします。では」

軽く一礼し、セリナの方を向き、歩いてきて——そのまま、通り過ぎようとした。

「って、無視ですか——！？」

あわてて声をかけるセリナに、言われて初めて存在に気付いたかのような仕草でフィアは振り返った。

「なにか、用でも？」

心当たりがない、というように形の良い眉をひそめて言う。不遜な態度に、セリナはナディアと一緒に来なくて良かったと安堵した。

彼女の場合、間違いなくここで眉根が動いているところだ。

——私は大人ですから。ここは流してーと

よし。友好的な笑みを作り、セリナは尋ねた。

「フィアさんは、これからの予定は？」

「シャワーを浴びて着替え、部屋に戻ろうかと」

返答があるのなら、少なくとも会話できるだけの友好性は築けている。いける、とセリナは心の中で自分自身に頷きかけ、続ける。

「夕食はどこで？」

「いつも通り、自室で摂ろうと思います」

「あ、じゃあ、一緒に食堂で食べませんか？」

言ってから、会話の流れがおかしいことに気づく。

——「じゃあ」って、前の返答と繋がってません……！

失態だ。自然な流れで誘おうとしたのだが。果たしてフィアは表情を動かさずに一言。

「申し訳ありませんがお断りします」

「あ。そうですか……」

「では。失礼します」

会釈され、反射的に返してしまう。頭を上げると、すでにフィアは背中を向けて歩き出していた。

「あちゃー……こりゃダメダメですね」

天を仰いで額に手を当て、ため息一つ。

情報端末を取り出し、食堂に一人で向かう旨を伝える文を打ち込んでいく。

社員食堂は盛況だった。各部署の仕事が終わり、解放された社員たちが夕食を摂りに来る時間帯だからだ。

三桁の収容数を誇る席のほとんどは埋まり、椅子のないカウンタ―にも人が集まっている。

そんな中で、どうにか四人分のテーブル席を確保したミサキ達が食事を摂っていた。

「プラスマライフル——？」

揚げた肉を箸で切り分けながら、ミサキが聞き返す。

「ええ。今日は私とセリナさんは訓練を早めに切り上げて、新兵器の試射を拝見しましたの」

野菜のスープを掬いつつ、ナディアが言う。

「洒落にならない威力でしたよ。イクタチの装甲を正面から吹き飛ばしましたからね」

蕎麦のつゆを自前の水で割りながら続けるのは、合流したセリナ。「マヤさんは開発部でしたっけ？ アレに関わったりとかは？」

「いえ、私は武装より機体関係の方でして……。でも、うち——第六課で運用する兵器なので、資料は貰ってますよ」

デザートのパフェ——すーぱーでらつくす・ぷりん・あ・ら・もーど。総重量六百グラム、クリームとカラメル、各種果物とアイスがふんだんに使われた巨大なバベルの塔は、甘いものが苦手な者は見ただけで卒倒するような貫禄を持っている——を削りながら、話題を振られたマヤが情報端末を取り出す。

「……相変わらず、見ているだけでお腹いっぱいになりそうなモノを食べていらっしますわね」

ナディアは自分の口にまで甘い味が広がったような気がして紅茶を傾けた。言葉に、ミサキとセリナも首肯。

皆の視線を受けつつ、マヤのスプーンは順調に高度を減らしてい

く。片手で端末を操作していたマヤが、スプーンと口の動きを止めた。

「ああ、ありました。試作型プラズマライフル、開発時秘匿名称『ライコウ』。全長は対物ライフルと同程度ながら、大型ロケット砲クラスの破壊力を秘めた新兵器です。従来の兵器と比較して、携行性の低いロケット砲よりも運用しやすく、対物ライフルよりも破壊力が高いことが利点とされています。また、火薬式のロケット砲のような誘爆事故が起きにくく、反動が軽微という安全性も利点ですね。ただ、ロケット砲のように爆風で範囲攻撃をすることは出来ず、射程的にも状況次第では対物ライフルよりも短くなるため、単純な上位互換というわけではありません」

「……そもそも、プラズマライフルってなんだ？」

ミサキがナディアを見て言った。

「なんで私に振りますの？」

「いや、まあ、その」

マヤの前にそびえる巨大なパフェから視線を逸らした、とは言いつらい。

ミサキのあいまいな返事に、しかし意外にもナディアが気分を害さなかったのは、理由に気づいていたからか。

「火薬式の弾丸のように、プラズマの塊を撃ち出す兵器ですわ。確か、旧暦時代から研究されていたものだったはずですわね？」

「はい。発想自体は古いもので、歴史上、幾度も検討されてきた兵器でもありますね」

肯定し、マヤが講師のように続ける。

「概要としては、ナディアさんの言った通りのものです。プラズマは物質が膨大なエネルギーを秘めた状態でして、このエネルギーによって対象を破壊するんです。プラズマは空气中にエネルギーを放出してしまうため、弾としての使用は構想こそあれど実用化に至ることはなかったんですが、近年のエネルギー開発の恩恵としてプラズマを高圧縮して放出されるエネルギーを内部で循環させることに

より放出を防ぐ技術の研究が進んだおかげで、開発段階ではありますが、ほぼ実用にこぎつけたられたんです。これは、歴史上でもアマツ社が初めてでしょうね」

そこまですぐに一気にまくしたて、胸をはり、溶けかけたアイスを多めに掬う。

「……つまり、ああ、そうだ、凄いな、うん」

こめかみに指をつきながら、ミサキはなんとかその言葉をひねり出す。ナディアから冷たい視線が注がれた気がした。

「貴方、本当に理解していませんか？」

「……まあ、凄いなということだけはなんとなく」

「そう、凄いなですよ！ 快拳です！ で、さらに詳しい説明をしますとですね……」

「そこまですぐにおけ、キサラギ」

スプーンを握りしめたマヤの台詞に、突如、声が割り込んできた。

「こんなところでそれ以上続けると、服務規程と守秘義務に抵触するぞ」

「課長——」

皆の注目が集まる先、テーブルのふちに手をつく、コーヒの入ったカップを持った六課課長、カリスタがいた。

「課長も、ここで夕食を？」

「私だつてアマツの社員だ。食堂を利用する権利はある。偶然我が社の試作兵器の情報を垂れ流している奴を見て、どこの馬鹿かと思に來ただけだ」

「あつ……すみません。ちょっと興奮して……」

眉を下げるマヤ。カリスタは鼻を鳴らした。

「まあ、興奮する気持ちはわからんでもない。アレの制作者はキサラギの先輩に当たる人間だからな」

「先輩って——開発部の？」

セリナの疑問に、マヤは首を振った。

「もつと前、学校の研究室時代からの先輩です。すごく優秀な人で、卒業と同時にここに誘われたんです」

「では、その先輩を追って、マヤさんもここに？」

「あ、えっと、それは……そうなんですけど……」

ナディアが放った問いには、なぜか歯切れの言葉が返ってくる。

「ぼん、とセリナが手のひらを拳で叩いた。

「もしかして、先輩後輩ってだけじゃなくて、もっと色々しちやいたい関係という」

「そ、それは……！ いえ、違わないけど違うような、でも間違っていないというか」

顔を赤くするマヤの横でカリスタがコーヒーを啜る。

「そつえば、アーウムラウトは一緒じゃないのか？」

「あ、フィアさんもお誘いしてはいるんですけど、いつも自分の部屋で食べるからと」

話題の転換にマヤが食いついた。カリスタは、そうか、と呟き、テーブルについた手をあげる。

「まあいい。私はこれで出るとしよう。また明日な」

皆の会釈に軽く腕を振って応え、カリスタは黒髪を揺らして去って行った。

「さて、私たちもそろそろテーブルを空けませんか」

相変わらずの密度の食堂を見まわし、ナディアが言う。

「あ、ちよつと待ってください。すぐ食べ終わりますから」

マヤが急いでスプーンを動かした。満腹とは別の胸焼けの様な感覚に襲われた三人の前で、まだ二人分はあるのかといった量のパフェは秒針三回転の時間を持って完全に消されていった。

2 - 1 試作兵器（後書き）

荷電粒子砲とかプラズマキャノンとかそーいうのが使いたいお年頃です。ビームは浪漫。

他にも「こんな兵器もあんだよ！」というアイデアとか募集します。正直、自分ひとりでは知識に不足を感じる今日この頃。

閑話

アマツの社員寮は、第三研究所を取り囲むように、ドームの第二階層に十棟存在する。

そのうち、第五棟にミサキの部屋はあった。自動洗浄機能のついた白い塗料で染められた横長の長方形の建物に、そう広くはない部屋が横並びに収められている。そのうち、端の階段から最も遠い部屋の前で、ミサキは指紋認証機に指をあてる。

短い電子音が響き、ロックが解除された。

窓から外の薄い闇が侵入している明かりのない部屋に、ミサキは鞆を投げ出しつつ、照明と壁にかけたモニタの電源を入れる。

適当なニュースサイトでも見ようと、淡い光が広がる部屋で一際大きな光を放つモニタの白い画面を覗きこむ。

そのタイミングを計ったように、モニタの端でアイコンが転倒した。

「通話……アイシャからか」

指先でモニタに触れ、通信を開く。モニタの一部にウィンドウが開き、その中に短いこげ茶色の髪を散らした若い女性が映る。背景から、場所はおそらく自宅だろう。格好も、上半身はシャツを着ただけのラフなものだ。

『久しぶりね、ミサキ』

彼女はミサキが本来所属している警備会社、「カナメ・セキュリティ」の実働部隊のナンバー2、アイシャ・ユシア。

「およそ三週間ぶりか。なにかあったのか」

『こっちは平穩無事よ。暇すぎて会社潰れんじやないかと冷や汗かくぐらいね。で、暇だから、ちょっと様子でもみてみようかなと思つて』

別段、急ぎの用事というわけでもないらしい。様子を知りたいのならメールで済むはずだが、現代の人間としては珍しく、彼女は文

章よりも直接会話することを好むタイプだった。

「こっちは……まあ、大したことは起きてないよ。実戦はまだだし、A Z相手に訓練したのも同僚の顔合わせの時に一回だけだ」

「ふーん。普段、何してるわけ？」

「待機と訓練だな。あと事務仕事」

「へえ、訓練ってどんなよ？」

興味をそられたのか、アイシャが軽く身を乗り出した。

「基本的には射撃訓練かな。開発の一環とかいって、いろんな武器を使わされて感想書かされたりもする」

「なんか普通。面白い武器とかあった？　もしくは、発表されてない秘密兵器とか」

一瞬、プラズマライフルのことが頭をよぎるが、流石にそれを社外の人間に話すことは出来ない。ここは、当たり障りのない話をしておくべきだろう。

「俺は触ってないよ。まあ、試作の新兵器とかもあるのかもしれないけどな」

言うところ、アイシャはがっかりという感情を作る。

「あつそ。ま、期待はしてないけどね。そーいえば、研究所でしょ？　なんかこう、洗脳とか、ドーピングとか、生物兵器みたいのはない？」

「なんだそりゃ……」

ミサキはこめかみに指をあてる。そういえば、彼女はそんな題材がモチーフのガンアクションを好んできた記憶がある。

「あるわけないだろ、そんなもの。フィクションじゃないんだから」

「あら、実際に、データを取るために子供を洗脳教育して、無駄のない兵器の運用をさせたりって話はあるわよ。ミサキ、あんた洗脳とかされてない？」

「……期待に添えなくてすまないが、そもそも俺は子供じゃない」

「面だけなら結構いけると思うけどね——あ、冗談よ、冗談。睨まないの」

「睨んじやいないさ……まったく」

幼い、しかも見方によつては少女のような外見を、ミサキ自身は好んでいない。

「からかうんなら、切るぞ」

『悪いわるい。じゃ、話変えて——そうね、そーいえばこの前の訓練でさ』

ミサキはそのあと一時間ほど、三週間程度離れているだけなのに妙に懐かしく感じる話を続けていた。

閑話（後書き）

本編に関係あるような。ないような。
そんな話。無駄話。

2 - 2 セリナ vs ファイア

昼の陽を模した照明を照り返し、白い機体が輝いた。

輝きは二つ。演習場を動く、二機のトツカがそれだ。

二機は、コンクリートの上をスケートリンクのように、互いに一定以上の距離を離して円を描くように駆け抜けていく。

その様は、見た目はまるでフィギュアスケートのような感じだ。実際、その動きの規則正しい無駄のなさ、A Zを使ったフィギュアスケートでもしているのかと錯覚してしまうだろう。

優雅にすら見える動きで縦横無尽に演習場を移動する二機の間を、何発もの弾丸が光の線を引いていなければ。

戦闘は、初日のトラブルで延期されていた、セリナとファイアの模擬戦だ。

片方のA Zは銃身の長いライフルで距離をとりながら牽制を混ぜつつ正確にコクピットの場所を貫こうとする。

もう片方は、両手に短銃を構え、巧みに弾丸をかわし、射程距離まで近づこうとする。

両者とも相手の動きの二手三手先を読み、その先を読んだ相手の行動までを予測しながら機体を駆る。

「やりますわね……流石」

管制塔で二機の織りなす舞を見ていたナディアが呟く。

「操縦技術だけじゃないな。なんていうか、戦いなれてる感じだ」

隣で、ミサキが相槌を打った。言いながらも、その視線はモニタに映る二機の動きを追っている。さらにその隣、マヤに至っては、初めの内は何か起こるたびに小さな声で感嘆符をあげていたが、もはや唇の間に感覚を空けたまま、隣の声が耳に入らない程に画面に見入っている。

ミサキは、一瞬、定位置となっているモニタの前に腰掛けたカリスタがどのような顔で画面を見ているのか気になったが、後ろから

では確認しようがなかったので、考えを頭から追い払った。
それよりも、と視線を再び画面にあげる。

短銃を構えたA Zが、もう何回目かわからない接近を試みていた。

「これなら……どうですっ」

両手に短銃を持つA Zのコクピット内でセリナは呟き、右手、それに遅れて左のトリガーを引いた。一発目の相手の回避を読んだ、時間差の二発目だ。しかし、相手はそれすらも読んだかのように一発目の時点で大きく動いている。結果、弾丸は空を切って演習場の端に消えていく。

「読み読みつてわけです……かつ」

返しの相手の射撃。銃口を向けてからあえて一瞬送らせることでこちらの動きを読もうとすると判断し、機体を右に傾け——直後、左へと振る。

右わきをライフルから発射された弾が掠めていった。

回避と同時に撃ち返すが、相手は左右には動かない。その両脇を銃弾が抜ける。動じず、相手は射撃。

「ったく、可愛げのないかわし方をしやがりますね！」

セリナはコクピットで思わず毒づいた。言い放ちながら、身体は思考よりも早く機体を動かしている。正面、相手のA Zが放つ弾のうち、牽制の二発は無視、次の本命は右肩を押しこむように機体を逸らして回避、同時に放った左手の弾丸はあっさりとかわされる。

そこまでは読み通り。このパターンは既に三度目。ならば、と右半身を逸らしたまま、強引に右腕を向けて射撃する。

——今までのパターンなら、回避の直後は牽制！ 崩しに行きます！

果たして、敵は牽制を放とうと銃を構えていた。回避に入る時間が一瞬だけ遅れる。

——ならば、こちらの間合いです！

音速に近い弾丸のやり取りは相手の動きの読み合いだ。相手の読みが外れ、思考が遅れば、一瞬、それだけの時間の分、後に続く動作が遅くなり、先手を取れる。

間髪いれずに両手で射撃。

相手は、先ほどのこちらと同じような動きで一発目を回避した。銃を向けながら弾をかわし、反撃に移ることが出来る避け方だ。だが、一瞬の遅れに今まで以上にこちらの接近を許してしまっている。セリナは、硝煙の煙を残す左の短銃から手を離す。その延長の流れる動きで腰のヴィブロブレードを逆手に抜く。

——この機会を最大限に利用するなら……一気に、懐に！

続く二発をかわしつつ、相手のライフルが火を吹く。吸い込まれるように、セリナの機体の肩に命中、塗料が、鮮やかな色を散らす。セリナは止まらない。被弾は予想通りだからだ。規定ではコクピットへの被弾以外はノーカウント。接近の代償ならば多少の動きの乱れは許容範囲だ。

「いきます！」

短銃の落ちる音が背後から響くのを聞き流し、居合のように腰のために作る構え方で、ブースターを最大限、最大加速。

対し、相手も動く。下がりながら左手を腰の後ろにまわし、ブレードを握った。

だが、遅い。間合いに到達した瞬間、腹から胸を裂く軌道で腕を、ブレードを振る。

「——！？」

その腕に、手ごたえ。こちらを押し戻す力。

「腕で、ブレードの刃を……！」

相手の右ひじが、コクピットをかばうように突き出され、こちらの刃を止めていた。

ヴィブロブレードは刀身を超高速で振動させ、対象を切り裂く武器だ。だが、訓練であるため、今回の得物は重量と形はそのままなものの、刀身から塗料が噴き出して軌道を描きこむものを使用している。それ自体は、尖ってはいるものの、切断力は無いに等しい。

——実戦なら、腕ごと切り裂いてるはずですがっ！

これは模擬戦で、さらに言うならばセリナの機体は肩に被弾しているため、この攻撃自体が無効になる。相手の行動に文句をつけられないだろう。

「ちい！」

舌打ちし、ブレードを戻す動きで切りあげる軌道をとる相手の左腕を迎撃。ブレード同士がぶつかり合う。

押し合いの中、最早無意味と判断したのか、相手はライフルを落とした。

合図としたかのように、二機がはじけるように離れる。出来た距離はA Z一機分。射程の短い短銃でも、この距離ではブレードの方が早い。せめて、一機半ならば。

——仕方ない、ですね

「格闘戦の腕、見せてもらいましょうか」

仕掛けるのはセリナ。前のめりで、刃を水平に、コクピットに向かって突き出す。相手は、左足を軸に半円を描くように刺突を避け、背中に切りつけるようにブレードを振りおろした。

しかし、軌道が乱れる。セリナの右腕が胸元を押しこんだからだ。

そのまま、相手を押し出す動きに連動して下からの袈裟掛け切り。相手が右腕から逃れるようにのけぞり、刃はわずかにコクピットに届かず、空を切る。

——避けますか！

ならば、とセリナはフットペダルを踏みぬく。そのまま押し倒そうという考えだ。

相手は瞬時にこちらの考えを読んだのだろう。反身を翻し、こちらから離れようとする。

「それこそ、読み通りです！」

セリナの機体は急な加速にバランスを崩す。人間ならば、転んだように上半身突き出し、そのまま地面に転がり込む体勢だ。

「——っ！」

だが、人間ならば、だ。幾ら人型をしていても、AZは人間ではなく、

「こ……の……！」

股関節の可動範囲ぎりぎりまで足を広げて状態を支え、無理やり腰をひねり、各部のスラスタで強引に機体を持ち上げる。

装甲同士がぶつかり、関節への負荷が増大していることを示す警告が鳴る。三半器官を振りまわすようにモニタが揺れる。噛みしめた奥歯が痛い。しかし、

「つつああああ——！」

立てなおした。

不安定な体勢のまま、機体を転換する。

この駆動で距離は稼いだ。

ならば。

「私の勝ちです！」

セリナは右腕の短銃を、ブレードを構え追撃の体勢をとる相手に突きつけた。

画面の中、対峙するA Zは動かない。つられ、管制塔の中の空気も凍っていた。

「終わった、か？」

静寂を破ったのは、ミサキ。

声に反応したように、片側のA Zの胸部が開き、両手を挙げたパイロットスーツ姿が顔を出す。遠目でもわかる黒髪は、フィア。

「終了だ。この模擬戦は、セリナ・ナカザトの勝利とする」

カリスタの声が、マイクを通じて演習場にこだまする。

ふう、と気の抜けた息を吐くのはマヤ。彼女は胸を抑え、ミサキを見た。

「一進一退って感じでしたね。見てるこっちがドキドキしました」

「相對したことはありませんが……出来れば、避けたい相手ですね。それほどの実力ですわ」

ナディアはモニタを睨みつけるように視線を飛ばしていたが、瞼を閉じ、嘆息する。

「まあ、負ける気はありませんが。ミサキさん、あなたもそうですわね？」

好戦的な目を向けられ、ミサキは内心軽く汗をかきながらも、応える。

「まあ、な。負けるのは性に合わないし」

自信があるか、と聞かれて無いと言える性分はしていない。聞いて、ナディアはなぜか満足げな表情をした。

「結構。曲がりなりにも、一応、模擬戦とはいえ、この私に勝利したのですから、それくらいの自信は持っていただきませんと」

相手を褒めるといふより自分を持ち上げる言い方だが、それなりに認められたのだろう、一応。そう思い、ミサキはなんとなく心が軽くなった気がした。

もっともそれは、本人すら気付かないほどの小さなものであったが。

「さて、降りるぞ。お前たちは先にいけ」

AZから降りて待つように指示したカリスタが椅子から立ち上がり、機材の電源を落としていく。マヤが小走りにエレベーターに駆け寄り、スイッチを押した。

——なんか、気まずいんですね……

膝立ちになったAZの脚部に背中と体重を寄せて、セリナは天井を見上げていた。別に何かがあるわけではなく、視線を置く場所がなかったただけだ。

ふと視線を移し、フィアを見ると、彼女は直立不動でAZの隣に

立っている。

人形じみた顔立ちだけに、動かないと余計に生きているように見えない。

彼女と二人だけ、というのはどうにも気が持たない。模擬戦は終わったとはいえ演習中なのだから、緊張感の一つでも持っているべきなのだろうが。

——ま、そういう性分じゃあないですからね

セリナはナディアのようなお嬢様どころか、一般人以下の出身だ。どうにも堅苦しいのは似合わない。

——収入は安定するし、機体も新鋭のものが配備されるっていうから引き受けたんですけどね。

六課のメンバーとは、仲良くやっているつもりだ。カリスタの頑なな態度も、上官としては好感が持てる類のものだ。ただ、どうしてもフィアとだけは距離が縮まらない。

こちらからのアプローチは先日失敗してしまったし、あちらからのアプローチは期待しづらい。

——ま、腕は確かですから。それだけでも同僚としては充分ですけどね

フィアの身体を見て、そういえば、と思う。彼女が幾つかは知らないが、あれだけの腕が必要となる戦場を経験している年齢には到底見えない。好奇心に駆られ、軽く調べて見た所の経歴はほとんど不明。年齢、出身、家族関係まで一切不明。

セリナ自身も傭兵としてはかなり若い方だが、それでも二桁前半の年齢からA Zに乗り続けた結果だ。フィアがそうでないという確

証はないが、なんとなく違う気がする。

——女の勘ってやつですか。あまり頼りがいはありませんが

そんなことを考えていると、四人の制服が見えて来た。管制塔で観戦をしていた皆だろう。

「集合」

カリスタの声に、フィアが駆けよる。セリナも、背中を追った。フィアとセリナ、それにミサキ、ナディアが横に並び、カリスタの脇にマヤがついたのを確認し、カリスタが口を開いた。

「これで、全員が一回ずつ模擬戦を体験したことになるな。日々の訓練もあって、ある程度機体には慣れてきたことだと思う」

四人を見まわし、

「各員の实力は個々の報告書や先の模擬戦の結果である程度把握している。今後は、A Z 同士の演習を交えつつ訓練に励み、研究所からの指示で戦場に赴くことになる」

区切りをつけるように、瞼を降ろし一息。視線をあげ、

「それは、おそらくそう遠いことではない。すでに一部では試作兵器を使う訓練も行われている。その推移如何では早晚出勤命令が下されることもある」

いいか、と静かな、しかし響く声を出し。

「この中の全員が、一応の実戦を経験しているはずだ。だからわかりきっていることだが、あえて言わせてもらおう」

静かな湖面の光をたたえた瞳に、心なしか揺らぎが生じているように見えた。

「実戦で飛び交うのは、殺人の道具だ。相手も、我々も、常に死ぬ可能性を孕んでいる。気を抜けば、喰われる。そういう世界だ」

揺らぎは一瞬で消え、水面は波一つ立たない水平に戻る。

「諸君らは戦場に出向く。それを念頭に置いて、常の訓練に励め。」

——以上だ。今日の演習は、ここまで。午後からは、各人のスケジュールに沿って行動しろ。質問は？」

演説に飲まれた皆の心が、地に足を着けていく。あるいは首を振り、あるいは無言で質問の無いことを示していく。

「よし。——解散」

2・2 セリナvsファイア（後書き）

乗ったときはこれだけ一気に書けるようで。

もつと逆転から逆転のような展開を書きたかったのですが、一手上回ったら勝ちな読みあいもいいよね？ 的な。まあそんな。

どこまで所謂「エース」の動きを描けるかが今後の課題。な、気がするよーな。

今後に繋がるようなものも混ぜつつ。

そんなんで。以上。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2530s/>

A Z ~ アーツ ~

2011年8月12日03時27分発行